

絡繰師大野弁吉の伝承的世界とその構造

——幕末の都市伝説——

小林 忠雄

-
- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 絡繰師大野弁吉の足跡 | 4. 弁吉の伝承的世界の分析 |
| 2. 弁吉自筆の著『一東視窮録』の概要 | 5. 弁吉伝承の背景とその構造 |
| 3. 『一東視窮録』の記載項目と奇物発明伝説 | |
-

論文要旨

江戸を中心とした近代科学のはじまりとしての合理的思考の脈絡について、近年は前近代論としてさまざまなかたちで論じられている。加賀の絡繰師大野弁吉については、これまでその実像は十分に分かってはいない。本論文はこの弁吉にまつわる伝承的世界の全貌とその構造について、弁吉が著した『一東視窮録』を通して検証し、幕末の都市伝説の解明を試みたものである。

弁吉は江戸後期に京都生まれ長崎に遊学し、あるオランダ人について西洋の医術や理化学を学んだという。その後加賀国に移り住み、絡繰の茶運人形やピストル、ライター、望遠鏡、懐中磁石や測量器具、歩度計などを製作した。

『一東視窮録』の表紙にはシーボルトらしい西洋人の肖像画とアルファベットのAに似た不思議な記号が描かれている。しかし、この西洋人は不明であり、またA形記号は、18世紀のイギリスで始まったフリーメーソンリーの象徴的記号に似ている。この書物には舎密術(化学)・科学器具・医術・薬学・伝統技術等々が記録され、特に写真術についてはダゲレオタイプと呼ばれた銀板写真法の技術を示したものであった。

こうしてみると、『一東視窮録』の記載はメモランダムであり、整合性のある記述ではない。いずれにしろ弁吉の伝説のように、その実態が茫洋としていること自体が、本格的な西洋窮理学の本道をいくものではなかった。そして、幕末期の金沢には蘭学や舎密学・窮理学あるいは開国論を議論しあう藩士たちの科学者サロンがあり、弁吉もその中の一員であったと考えられる。そして弁吉の所業は、小江戸と称された城下町金沢の近世都市から機械産業を基軸とした近代都市へと、その都市的性格を変貌するなかで、まったく都市伝説と化していった。それは柳田國男が表現した「都市は輸入文化の窓口である」という都市民俗の主要なテーマに沿ったものとして理解できる。

1. 絡繰師大野弁吉の足跡

江戸後期に加賀の平賀源内と呼ばれ活躍した絡繰師大野弁吉については、これまで碧瑠璃園の講談『銭屋五兵衛』や永井柳太郎の戯曲『銭屋五兵衛』など、加賀の海商人銭屋五兵衛との関係にて登場するか、あるいは学問的には一部の絡繰研究者および地元の郷土史家によって調べられた断片的な記録と製作物、人物紹介の記述があるのみであった。

江戸を中心とした日本の近代科学のはじまりとしての西洋技術や合理的思考の脈絡について、近年は前近代論としてさまざまなかたちで論じられ注目されるどころだが、一地方の外様大名の藩に身を置き、生涯なにやら不明確な西洋科学を駆使して人々を驚かせていたという、この謎の絡繰師の存在を、今日どのように位置づけて考えたらよいのだろうか。

特に、大野弁吉の死後まだ120年程しか経っていないにもかかわらず、弁吉についてはそれはあまりにもおぼろげな人物像であって、数多い伝説のなかにしかその存在を示せないのは、どのような理由からなのか。

また、この絡繰師が当時の世相と相俟って、すでになんらかの形で西洋知識を有しており、いわゆる当時のオピニオンリーダーとして活躍していた、江戸後期の何人かの加賀藩士との関わりがなかで、どのような役割を担っていたのか。

さらに、その後近代に入った明治初頭に、この絡繰師が伝えた技術が、この地方の殖産事業（産業技術）を推進するにあたり、どのような影響を与えてきたのかといったさまざまな問題が想起されるのである。

本論文では以上の課題を念頭におきながら、主として弁吉にまつわる数々の伝説すなわち伝承的世界の全貌と、その構造について、弁吉がもっとも詳細に自説ならびにもっていた科学知識を表示した自筆の著といわれる『一東視窮録』の内容を検証し、またそれを手がかりに上記の問題に関する分析的試みを展開してみたいと考えている。

まずはじめに、この絡繰師大野弁吉のプロフィールを簡単にまとめておきたい。

これまでの通説では、弁吉は江戸後期の享和元年（1861）十月、京都五条通りに住む羽子細工師の子として生まれ、当時比叡山延暦寺の寺吏であった叔父の佐々木右門の養子となって佐々木姓を名乗り、名を薫、別に義時と称した。

弁吉は幼少の頃から非凡な才を顕し、特に四条流の画を能くしたが、20歳のとき長崎に遊学し、当時豊後町の瀬戸物商であった伊里屋仙右衛門家に寄宿しながら、オランダ人某について医術や理化学を修め、また絵画や彫刻を学んだという。

その後弁吉は、対馬から朝鮮に渡り、日本にもどって紀伊国に遊び、この間、馬術や砲術、算学、暦学を究めたとされているが、確かなことはわからない。

やがて京都に帰った弁吉は、加賀国大野村の出身である中村屋八右衛門の娘うたと結婚し、中村屋を名乗った。

そして、弁吉は京都にて、既に弁吉の弟子となった加賀出身の米林八十八と妻うたとともに、天保二年頃（1831）うたの故郷である金沢近郊の漁村大野村に移り住み、そこで知り合った隣村の宮腰（現金沢市金石町）の豪商銭屋五兵衛と親しく交わり、その後は銭五の知恵袋として広く知られるようになった。

しかし、実際に弁吉の偉業はというと、公的な仕事については何も知られていない。ただ木製の歯車を使った、いわゆる時計絡繰の技術を駆使した茶運人形や京都の山鉾を模した山車絡繰、同じく螺旋仕掛の動物をつくったこと。また、火薬を使った光源傀儡（花火人形）をして見せ、拳銃（ピストル）や点火器（ライター）のようなものをつくったこと。さらにガラス製作技術を駆使して灯火具や望遠鏡をつくり、測量術によって懐中磁石や測量器具、歩度計などの計器類をあみだし、そして当時としては珍しいエレキ（電気）をもてあそんだことなどが伝えられているにすぎない。

ちなみに、加賀藩幕末の儒学者である黒本稼堂が記した『三州遺事』には「弁吉ハ多芸ナル人ニテ、モトハ竹田ノ生人形ノカラクリヲ学ヒシモノ」とある。⁽¹⁾

弁吉は号を鶴寿軒あるいは一東と称していた。一東とは生涯のあいだ、ひたすら東の方位にある江戸（東都）を目指していたからだともいわれるが、これとて不確かである。

また、弁吉は加賀藩をはじめ若狭の小浜藩などからの士官の口を断り、もっぱら民間人に徹し、銭屋五兵衛とともに騒乱の江戸後期の時代を生きたが、明治三年（1870）五月に享年70歳で歿している。

以上までの弁吉の概略については、主として鍋木勢岐著『銭屋五兵衛の研究』1954年刊によるものだが、この鍋木説はその後書かれた大野弁吉研究の大半の記述が引用しており、もっとも基本的な著作物となっている。⁽²⁾

さらに、これまでに主要な文献資料として記された弁吉論のなかでも、時代的には比較的古く、しかも正確さをきして考証されたものを選び、要約すると次のとおりである。

田中鉄吉著『郷土数学』池善書店発行、昭和12年刊

“中村弁吉 生国は長崎と云ひ、又は大坂と云ひ、某説区々なれども、京都に生まれ叔父佐々木某の姓を冒し、通称を薫、字を義時と称せしこそ真に近きが如し。其妻は大野町出生の故を以て来り住み、中村屋弁吉と称せしことは、安政三年六月大野町肝煎山城屋次郎左衛門調査人別張に「一、家持 頭振中村屋 享和元酉出生 辨吉 文化十一戌出生 妻 うた メ 式人」と記せるを以て明らかなり。

一説には弁吉は錚々たる開港論者なりしが、過激の攘夷論を唱ふる浪士のため、危害の其身に及ばんことを慮り、来りて大野に隠れ匿名して大野弁吉と称せりと。これ稍誇称の

嫌あるもまた一説として掲ぐ。

弁吉は一東と号し鶴寿軒と云ふ。天文曆数算学及び医術に通じ又易占を能くす。資性窮理発明に長じ且つ博識多能なり。一事の推考にも数日端座黙想し、達せざれば措かざりしと云ふ。特に細工と彫刻は其技神に入り、又四条風の絵画に長ず。然れども枯淡寡欲毎に貧困に居して生涯を終れり。(以下弁吉の伝説を記しているが、後述にて省略)

弁吉は明治三年五月十九日享年七十にて歿し、同町傳泉寺門内に葬る。(法名釋巧善)超えて五年門人及び有志墓標を建つ。正面に辨吉墳と刻み、左側面に明治第五壬申林鐘朔日建之と記す。然るに此墓石は明治三五年頃に至り、決壊傾倒に瀕せしを以て、錢屋五兵衛の外孫小竹道四郎出資して改修す。(中略)

遺妻は明治十九年六月病歿し、嗣子なく家断絶す。氏の主なる門人に機械師米林八十、彫刻師葛木某、写真師小池兵治あり。米林氏は一光と号し南町に住み、其当時の測量器械は大抵氏の手になる、今は故人なり。小池氏は中町に於て写真業を営めるは普く人の知る所、今は八十四歳の高齢なり。浮彫師故相川松濤氏は氏の手腕に私淑し彫刻の妙を究む。石川郡徳丸村の医師松江安見氏は初め弁吉に天文学を習ひ、後医術を受けたりと云ふ。”
日置謙編『石川県史 第参編』石川県発行、昭和15年刊

“遠藤高環の晩年と時を同じくして中村屋弁吉あり。号は一東、別に鶴寿軒ともいひ、天保二年京都より来たりて石川郡大野に住めり。弁吉の出自と移住の理由とに就きては、毫も之を明らかにすること能はず。彼は学問に長ぜずといへども、能く螺旋仕掛によりて自動する人形・動物を作り、写真の術を考へ、電気を遊び、爆薬を製し、彫刻に秀で絵画を好めり。故に世の工夫発明の事を談ずるもの、嘖々として之を賞揚し、児童走卒といへども弁吉の名を知らざるなきに至れり、或は曰く、弁吉藩医坂元慎に請ひて蘭書の器械学に関するものを読ましめ、己は挿図を見て直にその理を悟ることを得たりと。明治三年五月十九日享年七十を以て歿し、大野の傳泉寺に葬る。”

立川昭二『からくり』(ものと人間の文化史3)法政大学出版局、1969年刊

この書では「からくり師列伝 からくり師弁吉」のタイトルにて弁吉を紹介しているが、基本的な情報は前述の鏑木勢岐著『錢屋五兵衛の研究』によっている。

ただ、立川氏は後述する弁吉の理化学書である『一東視窮録』(何故かこの本のなかでは『東視窮録』と記述している)に直接触れ記述しているので、ここではその部分のみを掲載しておきたい。

“その理化学についての知識は弁吉自筆の唯一の遺著といえる『東視窮録』一卷にみられる。各種の科学機器、エレキテルやボルタ式パイルなどの図解のほか、色ガラスや火薬の製法、鉱物・化合物・薬品の名称、さらにそれらの調合などについて、こまかな記述がみられる。弁吉の理化学知識は、この一書から憶測するかぎりでも当時としてかなり高い

水準に達していたといっている。

二回にわたる金沢・大野の弁吉めぐりで、私たちがこの目で見ることができた弁吉作のからくりといえ、大野町の粟森博吉氏所蔵の「三番雙」、それに金沢市の大友佐一氏所蔵の「唐子引盃台」の二点にすぎない。

「三番雙」はゼンマイのみ手作りの金属であるが、歯車などはすべて木製、调速機として天符冠形脱進機をつけている。この人形の機構は弁吉自筆の『東視窮録』にある茶運人形的设计とまったく一致している。ゼンマイをまくと手足をたくみに振って数メートルの円を描いて歩く。これまで実査したほかのからくり人形はほとんど部分的に破損して動かないものが多いなかで、これはいまでもじっさいに動いたという事実は、弁吉の機巧の才がとくにすぐれていた証拠ともいえる。

弁吉のからくりでもっとも傑作なのは逸話にもある茶運人形であり、その仲間として私たちは三番雙に接した。このプランを弁吉はどこから得たか。おそらく当時からくりの教科書として流布していた細川頼直の『機巧図彙』にヒントを得たことはたしかであろう。同著が刊行されたのは寛政八年、再刊されたのが文化五年、弁吉が青年時代にこの書を読んで心をたかぶらせたことは想像される。ただ弁吉が『東視窮録』に描いている「茶運人形之図」と「機巧図彙」のそれとは細部の設計に相違がみられる。とくに调速機の位置を異にしているのが注目される。こうした機構の要所にたいする改良に、いくばくか弁吉の発案に帰せられるものがあるにちがいない。”

つぎに、種村季弘「からくり弁吉の隠れん坊」(『遊びの百科全書6 人形からくり』所収) 日本ブリタニカ、1980年刊、では次の記述が注目される。

“大野弁吉の伝記作者が信憑に値する資料としてしばしば引用するのは櫻井経緯の「剪燈火談」の短い一節である。明治二十四年十月刊。弁吉に関するもっとも古い記録であろう。いま私の手元にある明治二十六年刊三品蘭溪著『錢屋五兵衛啼痕録』の弁吉に関する言及も、同書からの引用である。櫻井経緯ははじめに大野^{マツ}便吉が錢屋五兵衛の顧問として錢屋の海外貿易を陰になって助けたことを記してから次のように書く。

「便吉若うして長崎に遊び蘭人某に就て蘭書を修め頗る航海の術に精しく常に遠洋航海の大志を抱くといえども身体孱弱にして其志を達する能わざるを恨み遂に五郎兵衛^{マツ}に説き米州遠航の事を決せしむ彼れ又天文学に通じ旧来の天動説と地球回転の新説とを比較して之を真宗の僧某に授く」成人後の経歴はほぼ右に尽る。”

その他、弁吉に関する紹介および記述はいくつかあるが、基本的には前述した文献によるものが多く、ここではこれ以上述べる必要はないであろう。

その後の調査で、新たに発見された一枚の文書によって、このほど明白になったのは、弁吉が加賀国に来た時期についてである。

弁吉が京都から加賀に来た際に同行したという米林八十八(一光)が明治十一年(1878)に石川県に提出した身上書によれば、次のとおりである。ここではこの文書が弁吉の謎を解く鍵になると思われるので、とりあえず全文を掲載しておこう。

石川縣下第拾大区小八区南町四拾五番邸 米林八十八 隠居一光

文化十年八月五日金沢出生 六拾五才ニカ月

私儀

文政十年拾五才ニテ紙御細工人北隅半蔵殿方ニ弟子ニ罷越同十二年迄紙細工修行仕 同十月上京仕五条通橋下タ伯母聳中村屋喜三右ニ門方ニ止宿仕喜三右ニ門本家奇物師中村屋弁吉方ニ入門仕 同十三年四月弁吉同道ニテ帰国仕右弁吉は石川郡大野村ニ居住仕候ニ付改而奇物入門仕天保六年三月迄同所ニ止宿仕 同年四月江戸表ニ罷越外神田金助町従弟米林峯吉方ニ止宿仕内神田十間店 居大道具仕掛師長谷川勘兵衛方ニ入門仕同七年九月迄修行仕 同年十月ヨリ同八年三月迄米林峯吉方ニテ人形細工並根付彫工等營業仕 同年四月ヨリ同九年三月ニテ外神田金沢町ニテ御殿中御張付師棟取鳥羽音次郎方罷越御本丸御用相勤 同年四月帰国仕金沢上堤町居住仕諸品奇物營業仕 嘉永二年正月ヨリ五月迄能登国七尾ニ罷越府中町旅籠商船蔵屋與三右ニ門方ニ止宿仕時計修復方並奇物營業仕 同五月ヨリ七月迄同国宇出津ニ罷越尾山屋源右ニ門方ニ止宿仕營業右同断 同七月ヨリ九月迄同国宗玄ニ罷越引山人形等新出来修復仕同十月帰国仕 同三年六月ヨリ二之御丸金谷御殿巽御殿等御用相勤左ニ記載之諸品指上申候 文久三年四月ヨリ雷管製造売捌被仰渡 同四年五月御鉄砲所御用被仰渡相勤罷在候 長男八十八儀職業追々就達仕候ニ付明治四年十一月右八十八ニ家財讓渡シ隠居仕 当時南町ニ転宅仕奇物類天文地球測量器等營業仕候以上

營業出来品目

- 一 紙細工
- 一 唐木象牙根付彫カラクリ根付等
- 一 人形ゼンマイカラクリ
- 一 器械大仕掛水車仕掛等
- 一 金銀鉄物等細工
- 一 指南車
- 一 モウル写菓子器類
- 一 唐物古銅鑄類
- 一 文人用具諸品細工
- 一 唐木細工
- 一 望遠鏡
- 一 唐物漆塗細工

- 一 琉球箔画
- 一 唐物描金
- 一 金石篆刻並鈕彫
- 一 青貝類細工
- 一 西洋時計修復
- 一 西洋形瓦斯燈類
- 一 ペンケパニシ塗薬品製造
- 一 地理測量器並絵図具

右諸品従前出来申候処如断御座候以上

明治十一年九月 器械師 米林八十八

石川縣第二課博物館御中

この文書の記述によれば、文政十二年（1829）に京都に在住していた米林八十八は当時16歳だが、既に中村屋弁吉と名乗る奇物師に弟子入りしている。奇物師とは文字どおり珍しい品物、不思議な物をつくる職人ということで、ここでは蘭学技術を駆使した諸々の奇妙な物をつくる人物であったことを示している。

そして、翌十三年（1830）四月には弁吉と八十八は加賀国入りをしており、この米林八十八の身上書の内容は信憑性が高いものと考えられるので、従来からの天保二年（1831）の弁吉加賀入国説は1年早まることになろう。

また、八十八は弁吉が大野村におちつくやいなや改めて内弟子となり、天保六年（1835）三月までの約6年間を弁吉のもとで修行したことを明記している。

その後、八十八が何故江戸へ行ったのかは定かではないが、身につけた弁吉の技術をより以上高めるための出奔なのか、あるいは弁吉が江戸で一旗あげんと大望を果たせなかった夢を、弟子である八十八が代わって実現するために東都へ出向いたのか、また弁吉と八十八との仲が急に悪くなったから等々の疑問がここでは残る。

ちなみに、2人の年齢を照合すると、2人が出会った文政十二年は弁吉が満28歳、八十八が満16歳であり、八十八が江戸へ出て弁吉と別れたのはその6年後で、弁吉34歳、八十八22歳という両者ともにもっとも油の乗り切った活躍可能な時期であった。

従って、何故弁吉は八十八とともに江戸へ行かなかったのであろうか。

さらに、八十八は天保九年（1838）までの3年間を、江戸にて滞在し修行した後金沢に戻り、市中の上堤町に店を開くが、その11年後の嘉永二年（1849）には能登の七尾にて奇物営業を半年余りおこなって再び金沢に戻り、加賀藩御用を勤めるほどに著名な器械師となっている。すなわち、江戸から戻った後の八十八と弁吉との関係は、かつての師弟関係を越え、既に八十八は立派に一人立ちし、営業活動を行っている様子がこの身上書から窺うことができる。

2. 弁吉自筆の著『一東視窮録』の概要

大野弁吉すなわち中村屋弁吉が書き遺した書物は数冊あるが、現存するもののなかに印刷されたものは一つもなく、大方は手書きの墨本である。ちなみに現在分かっているものは次のとおりである。

- ・『一東視窮録』 自筆本1冊 (金沢市 大友佐八郎氏蔵) 成年不詳
- ・『奇器製作書』 自筆写本1冊 (金沢市 大友佐八郎氏蔵) 成年不詳, 伝弁吉
- ・『應象寛曆書』 自筆写本8冊 (金沢市 朝倉昭文氏蔵・石川県立金沢泉丘高等学校蔵)
- ・『八線真数表』 自筆写本2冊 (金沢市 朝倉昭文氏蔵) 成年不詳
- ・『実符曆書』 自筆写本5冊 (金沢市 朝倉昭文氏蔵) 成年不詳

その他弁吉の弟子のひとりであった朝倉長右エ門が自筆した『大野一東之伝法諸々免許』(嘉永二年記述)と題したもの, 『一東之伝薬法』(成年不詳)と題したものが各1冊あり, 同じく長右エ門が弁吉から学んで筆写したといわれる『八線表』『本曆根本図法』『花火根本仕種秘伝方』『万花火之雛形』がある。(金沢市 朝倉昭文氏蔵)⁽³⁾

このなかで最も注目されるのは『一東視窮録』であり, 奇物師としての弁吉の足跡と能力, 謎めいた人物像を解明する手掛かりとなる唯一貴重な書物である。

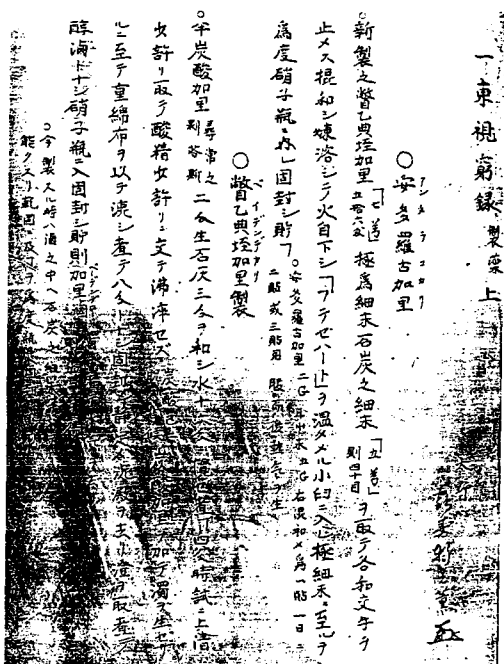


図1 『一東視窮録』の最初のページ, 右下に号と花押が記されている。

この書の題名は, 大友家本の本文頭に「一東視窮録 製薬上 大野 鶴寿軒 薫花押」と記されていることによって, 付けられている。(図1参照)

だがこの書は, もともと2冊が現存していたらしく, 今明確なのは現在金沢市長土堀町の大友佐八郎氏が所蔵するもので, 他の1冊は行方不明である。

このもう1冊の類似本については, 昭和十六年に金沢市立図書館にて金沢文化協会が主催し行った郷土の発明工夫展覧会に出品されたものらしく, この直後の昭和十七年に刊行された日置謙著の『加能郷土辞集』には当初記載されなかったが, その後刊行された改訂版には急遽, 『一東視窮録』の書物名で記載している。記述は次のとお

りである。

“一東視篆録 中村屋弁吉の筆録で、大野鶴寿軒薫の署名がある。初に FIDENOETOESI EEN OOST といふ者の肖像が描かれ、和蘭文字及び数個の単語を載せ、続いて舎密術・器械・銃砲・火薬・花火・陶器釉薬・砂糖・糍・酒・菓子・時計等のことを精細なる図解を以て記し、イヨジーユム鏡と題した写真術、空砲と名付けた空気銃、螺旋仕掛の茶汲人形、一東工夫と特記した同一の蛙根付などが眼を惹く。その前半は訳書らしく、後半は自記⁽⁴⁾であろう。”

これに関して、金沢の郷土史家である山森青硯氏は次のように記している。

「余弁吉覚え書帳（一東視窮録—大友本）は未見であるが、かつて長岡本（柳川蔵本中に写本⁽⁵⁾されたるもの）を見たことがある。いずれも年号の記入のないことは事実である。」

この長岡本なるものが『一東視篆録』なのかどうかははっきりしないが、可能性はきわめて高く、従って『一東視篆録』は『一東視窮録』（大友本）の写本ということになるであろう。ちなみに、筆者が見たかぎり、現存する大友本の『一東視窮録』は、基本的には写本の雰囲気はなく、まったく弁吉自筆のものであるに違いない。

この書名に記された「視窮」の窮の字は漢字辞書によれば、「きわまる・つまる」の意だが、「尽きる」の意もあり、同訓には究の字もあって、「物事の奥底までたずねきわめる」の意味となり、「窮理」の語彙は「物事の道理をきわめる」意味として使われている。いっぽう「視篆」の篆の字は「銘記する」の意味で、単に記録するの意味が強い。従って「視窮録」の場合は窮理学について見たものを記録した意味となり、「視篆録」の場合は見たものあるいは既に銘記されたものを記録したという単純な意味ととられ、どちらかと言えば、「視窮録」の語感には当時の時世を配慮すれば、自筆の科学メモにふさわしい、ひとひねりした弁吉特有の性格が感じられる⁽⁶⁾。

『一東視窮録』の成立年代については、明確に記されていないが、本書の内容を検討してみた結果、弁吉が発明した「一東工夫 蛙根付」の製法が嘉永六年（1853）と記されているところから、少なくともそれ



図2 中扉の西洋人の肖像画とオランダ語を模して書いた文字と意味不明の象徴的マーク

以後の記述となろう。

『一東視窮録』の表紙というか、中扉には別図(図2)に示したように、西洋人の肖像画を中心に、上部にはアルファベットのA形文字にL, S, K, の文字を被せ、その下には前述の「FIDENOETOESI」の文字と下部には同じく「EENOOST」の文字が記されている。

まず、「EENOOST」については、オランダ語で「一東」を表したもので、ここでは著者名を顕したことになる。

次に、「FIDENOETOESI」は京都大学人文科学研究所に所属し、同じく我々とともに弁吉研究を推進している松田清氏の発見にて、松田氏は日本語をローマ字風に表現したものにて「秘伝の写し」の意味であろうという。

目下のところ不明なのは、描かれた西洋人が誰なのか、A文字にL, S, K, の文字を被せたこの記号は何を意味しているのかという疑問が、弁吉を謎めいた人物にしていると同時に、これを解明することが弁吉の実像を明らかにする鍵のひとつと考えられる。

伝説では、弁吉は20歳のとき長崎に遊学し、和蘭人某より蘭学を得たとされている。

これについては、前述の鍋木勢岐『銭屋五兵衛の研究』によれば、金沢出身の政治家である永井柳太郎が、そのエッセイ「銭五の蔭の人 大野弁吉」(中央公論 昭和13年10月号掲載)のなかで、弁吉が長崎遊学の際についた蘭人の師はシーボルトではないかと仮説し、シーボルトの従僕をしながら蘭学を伝授されたものとする。そして、その後文政十一年から十二年(1828～1829)にかけて起こったシーボルト事件に連座することを恐れて、弁吉は対馬から朝鮮に渡り、帰国後もたえず人目を避けていたと推定していることを紹介している(シーボルトの従僕説)。

ちなみに、前述の立川昭二氏も「洋学最大の恩人シーボルトがオランダ商館の医師としてはじめて出島に着任したのは文政六年(1823)であり、弁吉が長崎に遊学したのも同じく文政五～六年頃にあたり、いわゆるシーボルト事件によって国外に去ったのが文政十二年であるから、まさに弁吉の長崎滞在期間と時をおなじくする。」と述べている。⁽⁷⁾

さらに、その後シーボルト事件に連座した人物のひとりに弁五郎という名の関係者がおり、はじめ弁吉と弁五郎とは同一人物であるという説があった。しかし、『シーボルト先生・その生涯及び功業』によれば、長崎での関係者の幕府判決がおりたのは文政十三年(1830)の閏三月二十五日であって、オランダ人部屋付日雇いの6人の名があげられ、そのなかに弁五郎なるものが実際に存在しており、入牢また過料の刑に処されていた。

すなわち、前述の米林八十八の身上書では、弁吉はすくなくとも文政十二年十月には既に京都に在住し、奇物師として仕事をしていたことになるから、ここでは確実に弁吉=弁五郎説は崩れたことになる。

しかし、弁吉が長崎に滞在した経験があるとしたならば、この弁五郎と何らかの接触および交遊関係があったかもしれないと思わせるのも、偶然とはいえ「弁」の字を名前の頭に付けて

いる故からであろう。

1989年11月に筆者の研究室を訪れた、元オーストラリア外交官で現在ノンフィクション作家であるウォーレン・リード氏に、この『一東視窮録』の中表紙に描かれた西洋人の肖像を見せたことがある。氏は日本では江戸後期の銃の密貿易の研究をしているとのことで、当時の西洋風俗に造詣がふかいところから判断した結果、肖像人物の襟カラーとネックチーフの結び方に時代的特徴があり、シーボルトが長崎に滞在した頃の1820年代に西洋で流行していた形態によく似ていると指摘しており、この意見は注目された。

また、シーボルトの肖像との照合では、シーボルトが1829年頃に妻“たき”と娘の“いね”の像を表した合子と共に自らの肖像を描いた螺鈿合子を製作しており、自身がライデンに持ち帰ったものと、その表情および髪形はきわめてよく似通っている⁽⁸⁾。

いずれにしろ、弁吉とシーボルトとの関係はこれ以上の資料がないため、実証することはできないが、多くの問題をもっていることだけは確かであろう。

筆者の私見では、この『一東視窮録』の内容を見るかぎり、弁吉は何らかのオランダ人との接触はあったものの、むしろシーボルトとの直接の繋がりや関係はうすいのではないかとの思いがある。

その理由として、シーボルトは基本的には医師として長崎に来ており、シーボルトから多くを学ぶとすれば、まず第一に西洋医学が中心でなければならないはずなのに、『一東視窮録』には西洋医術の、例えば解剖学や外科手術などの本格的な記載がない。

さらに、文政七年(1824)にシーボルトは長崎大村町の吉雄塾と樺島町の檜林塾にて、書生たちに医術や万有学を講義することが許され、その年の暮れ、出島の商館長ストウルレルから長崎奉行宛に提出された書状にも「昨年ドクトル・フォン・シーボルトを御地に派遣致し候 同人儀は和蘭有数の学者にこれ有り、内科・眼科・産科・薬学科並びに博物学・地理学の大家に候えば、充分この目的を達し申すべく……」と記され、シーボルトが日本人に伝授した蘭学には、上記のような一種の傾向があったように考えられる⁽⁹⁾。

ここでは、もう少し眼科治療をめぐる記述と照合させながら、この問題に触れつつ新たな検討をくわえてみよう。

シーボルト事件の要因のひとつといわれるものに、その頃江戸幕府の眼科医師であった土生玄碩が、シーボルトの知っていた開瞳薬の製法と、将軍家からの拝領品である葵紋付帷子^{かたびら}とを交換した事実が発覚したことがあげられる。

これは、土生玄碩があみだした眼科医術で、腐れ眼を治すのに細い鍼で角膜に小さな穴をあけ、その鍼の先をこじくりまわして、中の膿を取り出す「小鋒鍼法」と呼ばれる手術法に関する事件であったが、この「小鋒鍼法」は当時ヨーロッパで広く行われていた、イギリス人眼科医師セセルデンの発明による最新式手術法とまったく同一のものであった。しかし、大変危険

な手術だったため、シーボルトが眼中に点ずれば瞳孔が開くという薬の製法を知っているという
ことで、土生玄碩は幕府の禁制を破る危険を冒してまで、この薬物調合の法を得るために葵
紋付帷子とを交換したのであった。⁽¹⁰⁾

ちなみに、この開瞳薬の主成分は白色硫酸塩すなわち硫酸アトロピンのことで、日本の国内
には「莨菪」という野草に多量に含まれているとシーボルトが指摘したのである。このハシリ
ドコロは、山地の谷間に自生するナス科の多年草で、その根茎には猛毒が含まれており、その
成分からはロートエキス、硫酸アトロピン、臭化水素酸スコポラミンなどの原料が採取され、
特に硫酸アトロピンは副交感神経遮断作用をもっているところから瞳孔散大、瞳孔調節麻痺と
しての効果があり、日本ではその後眼科治療に使われてきたものである。⁽¹¹⁾

また、このハシリドコロは『物類称呼』にはナナツキョウ（江戸）・ハシリドコロ（肥後）
とあり、日本ではシーボルトが伝授した以前から一応知られていたようだが、瞳孔を開く効能
については、分からなかったのであろう。

ところが、弁吉の『一東視窮録』のなかには、いくつか記載されている医術法の一つとして
「眼病底と針法」と題した記述がある。以下主要な部分を記すと次のとおりである。

「水晶液病（ソコヒ也）必針術ヲ用シカルニ未タ不実者ハ神液丹ヲ度々点スル也大底ハ散
者之針法者障子之骨ノ不分ヲ以テ膿ノ実ス目当ナリ於是針ヲ施スナリ 節二三月八九月
ヲ佳ト為適宜見者直針カ佳既ニ年ヲヘテ針之期ヲ過ル者ハ横針ヲ施スベシ膿ヲ外ヘ出サズ

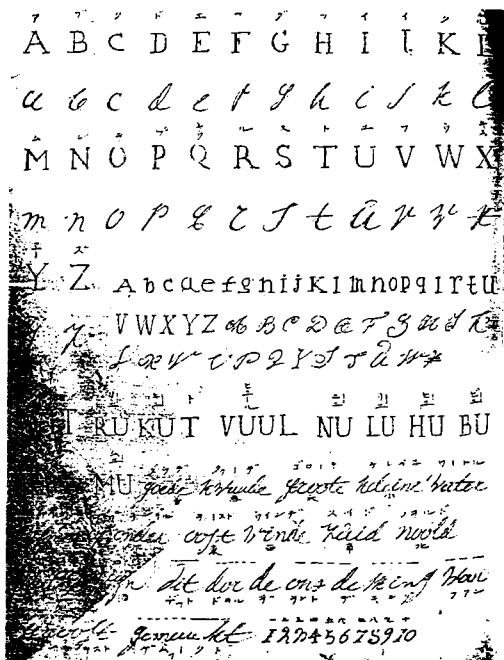


図3 オランダ語読みのルビをふったアルファベット文字

葡萄膜ノ裏ヘヒツケテ置ベシ先物メ
鍼ニ玄武散ヲ点スベシ……（以下略）

○玄武散之法 水仙根甘草等分黒相ス
ベシ○神液丹法喰塩 大 辰砂 小
水解シ用○大黃当帰湯法 將 芍薬
黄芩 杏仁 川芎針後不用○針ヲ施ス
一時前ニ煎服法 極上品之阿片二厘許
白湯ニテ下ス○亦半時前ニ二厘許リ用
ユ○今針ヲ用ユル前ニマリ子シヤ五分
計用針ヲ施ス……（以下略）

ここに記載された眼病治療は、どうやら
「小鋒鍼法」には違いないが、どこにもシ
ーボルトが土生玄碩に伝授したとされるハ
シリドコロや開瞳薬に関する記載は見当た
らない。

また、ここで記載された玄武散という名

称の薬の原料である水仙根・甘草は、ともに開瞳薬とは全く無関係であり、眼科治療法としても疑い深い仕法と見なければならぬ。

従って、以上の結果から弁吉の『一東視窮録』の記述内容からおして、シーボルトとの関係を繋げる部分は、かなり少ないように検証される。

この『一東視窮録』には、肖像画のある中表紙の次にオランダ語の読みのルビをふったアルファベット文字といくつかの単語が記されている。多少とも比較的読み取れる部分を示すと以下のとおりである。(図3参照)

^ア ^ブ ^ク ^ド ^エ ^フ ^グ ^ハ ^イ ^ジ ^ク ^ル……

^リ ^ユ ^ク ^ト ^ヒ ^ユ ^ル ^ニ ^ユ……

^グ ^ク ^ク ^ク ^ワ ^ー ^グ ^グ ^ロ ^ー ^テ ^ケ ^レ ^イ ^ネ ^ワ ^ー ^ト ^ス
goede kwaade groote keleine water (善, 悪, 大, 小, 水)

^オ ^ー ^ス ^ト ^ウ ^ィ ^ン ^デ ^ス ^イ ^ド ^ノ ^オ ^ル ^ド
oost winde zuid noold (東, 西, 南, 北)

^ジ ^ド ^ド ^ル ^デ ^ラ ^ン ^ト ^デ ^キ ^ン ^グ ^ワ ^ン ^エ ^エ ^ノ ^オ ^ス ^ト ^ゲ ^ム ^フ ^ク ^ト
jid dor de ont de king wan eenoost gemuokt(この場合の単語を辞書で引く

と、不明単語、枯れる、冠詞、抜く、冠詞、王、悪い、一東、不明単語、という順の語彙にとれ、全体に文章としての脈略はない。)

上記のように、ここでは一応オランダ語の文字を表記しているようだが、その記述にはいささか問題がある。

例えば、Jの文字は左右逆に記され、また winde には文字の下に「西」とルビを記しているが、西はオランダ語でも west であり、ここで表記される winde は風の意味であって、弁吉は明らかに誤訳をしている。さらに「北」とルビしてある noold は綴りに於いて noord の間違いとなり、その他意味不明の単語も多く、わずか1ページのみの記載にもかかわらず、すべてが正確なオランダ語ではない点に曖昧さが感じられる。

もちろん本文中にも、ところどころオランダ語のスペルやカタカナ表記の箇所があるが、これらがすべて正確なオランダ語の記述であるかどうかは分からない。

次にもう一つの課題であるアルファベットのA形記号については、どのように考えればよいのだろうか。(図2参照)

この記号を詳細に検討してみると、まずA形の頭の部分は直角に描かれ、右側の斜め線は太く、左側の斜め線と中央の横線は細く描かれている。また、中央部には縦に太い線があり、その左右に細い三日月状の弧があって、その右下には点がある。A形記号の下端の右にも点が打たれており、FIDENOETOESI. と EENOOST. がそれぞれ語の末尾にピリオドを打っていることから、このA形記号は二つの語の組み合わせにより、成り立っているようにも見受けられる。すなわち、APO. & SKL. といった具合だが、これを無理やり繋ぐと APOSKL. & APOSTKL. という単語になり、とりあえずオランダ語辞書を引くと、よく似た単語として APOSTEL. なる単語が見出される。これは「使徒・開祖・伝道者」あるいは「放蕩者・道楽者」の意となり、

あえて深読みすれば「開祖」の意味が、下に示された西洋人の肖像画と関係しているようにも思われるが、これはまったくの推察でしかない。⁽¹²⁾

いずれにしろ、このA形文字には、弁吉が何かを見て写したか、あるいは自ら考案した文字の組み合わせを象形化したようであり、FIDENOETOESI. と EENOOST. の仕方の脈絡で考えると、弁吉らしい戯れというか、秘密めいた遊びを行っていたようにも思われる。

さらに、多少気になるのはこのA形記号が、18世紀初頭イギリスにおいて創設され、以来世界中にひろがった博愛主義団体といわれるフリーメーソン（フリーメーソンリー）の象徴的記号に、よく似ていることである。

これは、この団体への加入儀礼がきわめて象徴的・神秘的な儀式を行っていたことから、当初は秘密結社として知られていたが、実際には世界市民的博愛、自由、平等の世界を謳い、その実現をめざした18・19世紀のヨーロッパにおける、進歩的な知識人あるいは科学者・建築家が多数加入していた集団であるといわれている。

このフリーメーソンについては、大正十年(1921)六月号の『中央公論』に吉野作造は、「所謂世界的秘密結社の正体」と題する一文を掲載しており、そこでは「マッソン秘密結社なるものについて」という章として次のように述べている。「然るに、去年十二月の“公論”という雑誌をみると、これにもA秘密結社の陰謀とやらいう題で、麗々しく同じ材料を並べて居る。A結社などということがすでに彼らの無知を証明するもので、つまりフリーメーソンのシンボルがコムパスと弧形尺度より成るを、その形だけを見てAと間違っただけであろう」⁽¹³⁾

これは当時の陸軍借行社月報の記事として書かれた吉野作造の一文だが、フリーメーソンの象徴記号が日本ではかつてA記号として認識され、A秘密結社と称された時期のあったことが、ここでは極めて参考になると思われる。

近年刊行された吉村正和氏の『フリーメイソン—西洋神秘主義の変容』という著書によれば、日本人として最初にフリーメイソンとなったのは、明治初期に西洋哲学の紹介と普及に尽力した“西周”と、明治政府において法律制定に尽力した“津田真道”であるという。すなわち、当時幕府の蕃書調所の蘭学者であった西周と津田真道は、1862年に幕府の指示によって、オランダのライデン大学に留学したが、その指導教官であったフィセリング教授がフリーメイソンであったことから、2人はフリーメイソンになったという。

1864年10月のフリーメイソンの教会であるロッジの記録には「津和野生まれ年齢三十五歳の西周助は『徒弟』『職人』として承認された。西氏は必要な文書に署名し、ロッジの内部に招かれ、古式の慣例に従ってフリーメイソンとなった。彼が志操堅固であることが証明され、『兄弟たち』は彼に『光』を見ることを許す旨決定した。」と記されているという。⁽¹⁴⁾

このように、日本で最初のフリーメーソンとなった西周と津田真道は、ともにオランダにおいてフリーメーソンに加入しているのであり、その時期は1864年すなわち幕末期の元治元年で

あった。

もともと、このフリーメーソンについては、1717年にイギリスのロンドンで正式に発足し、その歴史的母体となったのは、中世の大規模な教会建築と結びついて発展した石工 mason のギルドであって、その事情は、フリーメーソンの構成単位たるロッジ lodge が、それぞれ徒弟・職人・親方に相当する3つの基本的位階をもっていることにも示されている。従ってフリーメーソンの代表的な象徴には、建築道具であるコンパスと直角定規が一对とされ、コンパスは「道徳」を表し、直角定規は「真理」を表すもので、このコンパスと直角定規を重ねた象徴記号は、道徳と真理の調和を示したものであるといわれている（この場合のコンパスと直角定規を重ねた象徴記号がA形記号に類似する）。

ヨーロッパにおけるフリーメーソンの普及の歴史は、特にフランスとドイツにおいて急速に広められ、さらに1734年には既にオランダのハーグにもロッジが開設されている。そのなかでも注目されるのは、1773年にフランスで独自のフリーメーソンが誕生したことで、これは新たにグラン・トリアンと称された。すなわち、この場合のオリアンは「東」の太陽の昇る方角としての「光」を意味する言葉で、フランスを導く「偉大な光」という期待が、この名称には込められていた⁽¹⁵⁾という。

従って、もし仮に『一東視窮録』に描かれたA形記号がコンパスおよびT定規であり、三日月状の記号が弧形定規であるとするならば、ここでは弁吉とすでに世界的規模で広がりつつあるフリーメーソンとの関係が考えられる。そして弁吉の号である「一東」も、その弟子の米林八十八が晩年に名乗った「一光」の号も、フリーメーソンの精神的志向性の象徴である「太陽の光が昇る東をめざす」といった意味のことを表現していることになるう。

ちなみに、弁吉の一東の号は、ひたすら東都である江戸を目指していたからとの伝説が、鏑木勢岐『銭屋五兵衛の研究』には記されているが、明確ではない。ただ、弁吉が使用した家紋には丸の中に太陽をあしらった扇子（日の丸紋）が描かれており、ここでも従来の日本の伝統的な家紋から、いささか外れた形式の文様であることに注意される。

筆者は当初、「一東」の号は彫刻師のなかには天下一を自称して、頭に一をつける風があるので、一東も彫刻師として自認していたことを意味していると推察したが、弟子の「一光」との妙に対をなす号の組み合わせ、あるいは理化学書の著書にしては『一東視窮録』と彫刻師の号をつけることの不自然さに、ある種の疑問を感じていた。

また、弁吉が生涯を通じてあらゆる士官の口を断り自由人に徹し、また一職人に徹したのは、当時西洋において一世を風靡した科学主義的思想やギルド精神に根ざし、自由平等博愛のコモポリタン精神をかかげるフリーメーソン思想に、弁吉が憧れ深く傾中していたような気がしないでもない。

3. 『一東視窮録』の記載項目と奇物発明伝説

弁吉が克明に書き込んだ『一東視窮録』の記載項目を分類すると、次のようになる。

(1) 舎密術(化学)関係項目

安多羅古加里(アンタラコカリ), 警乙典埵加里(ペイデンデカリ), 半炭酸加里, 生石灰, 芫青(ゲンセー・カンターリ), 黒熔散, 伊阿謂母(ヨヂユム), ヨヂユム製法, 綠色隠顯墨, 塩酸曹ス, 賽雷散(ブリキセメンドフトル), ポスポール(硝石), 発燭燐(ポスポリセトッキース), 結晶次炭酸曹達, 緑礬油(ラーリーハンコーペルロート), 磷化加爾基(リンクワカルキ), 東東磷(カントンセホスホール), ペーゲレスワートル, スランガステーン, マンロンチン(カリユス), 白羅波律斯(コーデヒュール), 降雷金, 炭酸諳模尼亞水, アラビヤコム, 塩酸(ソロウトシュール), 寒水ヲ為ス, 丹礬精, 雷銀, 紙引鉋, 鳴雷子, 雷瀆, 硝酸(ステルクワートル), 亞爾箇兒(アルコール), 加爾苦窠篤兒, 酸化塩酸加里, 加里滷, 精製塩酸曹達, 厄利齊亞水(キリシア), 綉西加爾臥烏度(ミュシカールゴード), 爆鳴性, 硫黃華, 甘硝石精(サルベートルアーテル), 銀樹(シルフルボーム), 藍色隠顯墨, 鉛之隠顯墨黑色, 諳模尼亞水(アンモニア), 水素瓦斯得分量, 氷砂糖(キリスタリソイクル), 霸王塩, 酢酸鉛(鉛糖・ロードソイクル), 拔爾儒紐斯磷(ハルテュイニユスリン), 硝子乳白器, 紅墨水, エーエイルソイクルウエーン, 加黙良(カメレオン), カルンス, 薄荷塩, 硝子紙, 弗耳乙蕪把多(フルーイスパート・紅寶石名), 弗耳乙酸留, 亞硫酸水, 急ニ亞硫酸水ヲ製, 水素瓦斯(ワートルストフガス), 炭水瓦斯, 炭酸瓦斯(コールスーフシュール), 酸素瓦斯(シュールストフガス), 窒素瓦斯(スチックストフガス), 酸化水素瓦斯(ランープロッフェンドガス), 水之酸素瓦斯, 磷化水素瓦斯, 蘇魯林瓦斯, 蒲龍斯吻乙吉(ホリースクルーン・油彩用), 紫金, 加留母(タースメタル), 諳厄利亞亞斯(イギリス), 鑄硫和(人之作地震), 塩酸加里, 酒石塩(ウエーンステーンソツト), 麻佃涅失亞, 硝石作法, 硝石清ク製, 硝石作土灰分量, 焚合品, 炉土ソツピル, 生々乳, 尋常石鹼, 銀朱還魂之法, 剝篤亞斯等品, 鈕臘, 濕道降法(ソツピル), 玻黎(ギヤマン)製, 硝子色物分量, 硝子燈, 白硝子, 赤煉玉, 鋼(スタール), 彬斯別幾(ヒンスベッキ), 齊密羅爾(シミロル・コンヘイメルゴロウド), 敦拔加, 利応斯金(リインスキン), 白銅, 火打鏡撰光千里鏡之用, 近来用モリチール料, 大活字鑄, 烏金(シャクトウ), 真鍮合並諸合, 銀色地金合, 製銀合, 製金合, 唐金鉋筒合, 諸金細工色出煮液, 亜鉛減金, 銀塩焼付, 鍍金之金ヲ剥落法, 諸蠟合法, 白味流, 鏡磨, 時計之角リン, 金物洗液, 地腐之法, 白金(プラチナ), ドントルプラチナ, ボイス(モルチールの導火薬量), フルキット, ブラントコーゲル(燒玉薬量), リクトコーゲル(光り玉薬量), ゲスモルテントイク, タンブコーゲル(烟玉薬量), ゲスインドロンド(早火繩), ゲズインドペープ(早口火), ブラ

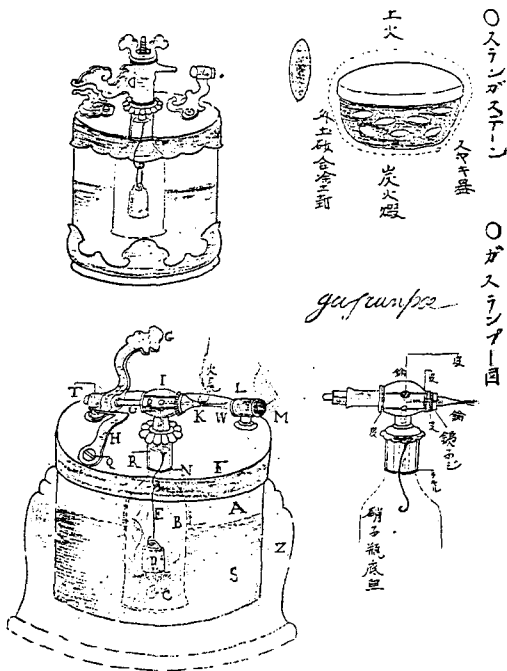


図6 ガスランプ図

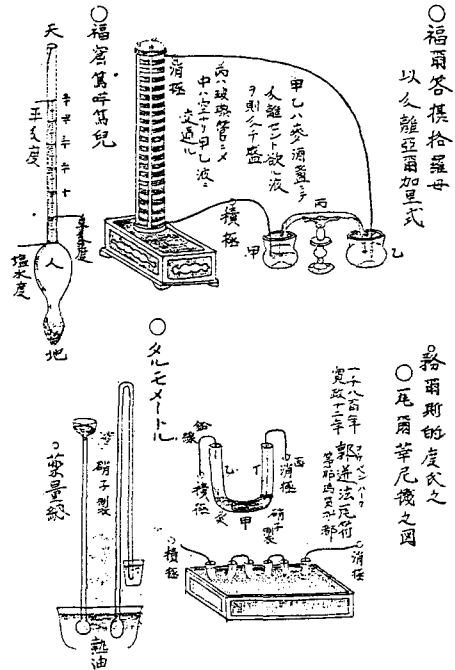


図7 電気分解装置や寒暑計の図

琥珀油, 童子散, 生葉色肉, ヤツボ膏, ケレスベル, チャン(乾油), 雷火灸艾, ラフダ(吐血薬), 五淋病妙薬, 痔諸付薬, 眼病底ヒ針法, 星流薬, 薬方調合之門(歯薬, 骨接散薬, シャク・ツカヘ・サンコミ各用薬), 金瘡油, 老ニ至ル迄歯落サル妙薬, 溜飲丸, 乳出来物散シ, 毒鼠薬, 腫子散大付薬, 軍中切疔薬, 狂気或小児セキ, 巴雄黄姜湯, 血止妙薬, 乳味湯, 瘡毒丸, 目洗薬, 耳薬, 赤万能膏, バジリコン, 小児胎毒下シ, 瘡落薬, 齒疼止, 鍍針塗薬, 痔病, 淋病, 目薬, 一切頭痛, 八流丸, 金消丸, 痢病, 疔切薬, 火傷, 焼塩, 小便閉握薬, 清朝程赤城伝, ケレスベリ, 回天神秘丸, 加味豆淋酒, 指之病, 金露丸, 枇杷葉薬, 飯膊湯, 八味地黄, ローザワートル, 耳之薬, 調栄湯, 血止, 辰砂散, 乳之出如薬, 目之星破, 風タンセキ如薬, 蛇咬妙薬, 切疔ヌウテニク渡シ薬, カスカイ膏, 神霊丸, 瘡毒丸天野孝亭之伝, 阿片丸, 虱被油, 赤玉神教丸, 花之露, 梅花油, ソゲ被散, 痢病除丸, 牛膽熊膽代, 諸乳病疼痛止如薬, 齒疼時含煎沸, 田虫伝法, 足裏皮薄, 目星取薬, 雷火灸, ツキ目妙薬, ホウソウ山ヲ上ル, 阿片製法, 長血血止薬, 火腹妙薬, 水腫脹満鼓脹, 子ヲ生ザル薬, 血止妙薬, 等々が記載されているが, これらの多くは調合の配分を示したメモである。

(4) 伝統技術関係項目

皮砥之伝, 花炭之焼法, 浮面香, 湯皮, 竹紫紅画染付(朝鮮伝来 一東朝鮮ニ渡受ル法), 烟火玉, 塩抜伝, 貼金硝子法, 硝子切貝, 降銀朱, 銀小刀, 銀朱焔, 早水晶, 羅紗, 鐘料, 大煩料(インヒヤ), 金銀古品灰吹, 灰吹伝, 鑄物蠟合, 金銀粉ヲ作, 烏晶ヲ白晶ニ為ス, 鶏冠

テーラ、リウヒ、落雁、生砂糖、麩之取方、ソウメン、芝舟、卦砂糖、菓子胡、等々が記載され、これらは弁吉の技術の基礎的部分をなしているのと同時に、伝統技術を応用した新たな製品開発を目指していた痕跡がある。(ここに示した伝統技術については日本の技術および東洋・西洋の区別なくまとめてある。)

以上の記述内容に対して、これまで弁吉にはさまざまな奇物発見の伝説が、地元の大野町・金石町を主に、金沢の町人のあいだで言われてきたが、その伝説とこの『一東視窮録』の記載とを実際に照合した場合、どのような根拠が示されるであろうか。

ここでは、まずこれまで確認できた弁吉の所業に関する伝説を分類し、まとめておく。

(5) 弁吉の出自・客姿・性格に関する伝説

5-1 弁吉の妻うたは中村屋八右衛門の長女で、石川郡大野村に生まれたが、幼少のとき河北郡津幡の某家の養女となり、その後、父の八右衛門が死亡したので、うたの母と祖母は京都に移住し、うたを養家より引取り、上京した。弁吉は京都で、はじめうたの母と関係したが、母の死後、娘のうたと結婚したという。出自伝説。

5-2 弁吉が加賀の大野へ来た時、身に携えていた物は、一丁の三味線のみであった。門人の米林一光は、弁吉が京都に在住の折からの弟子で、最も長く弁吉に付き添うた人であったという。放浪芸人伝説。

5-3 大野村の宮崎半四郎という人物の伝承では、弁吉は大きな男で、尾山(金沢)の城下にとどき虚無僧となり、両刀を腰に差して一緒に行ったことがある。弁吉は尺八がたいそう上手であったともいう。芸人伝説。

5-4 弁吉が加賀へ来たのは江戸に向かう途中のことであったが、妻うたの故郷の大野村は日本海に面した漁港であり、毎日新鮮な美味い魚が獲れたので、この地に逗留することになったという。都市的な粹人伝説。

5-5 加賀藩公はかつて弁吉を二十人扶持で召し抱えようとしたが、弁吉は御用命は奉ずるけれども、扶持は辞退すると言ったという。そして、弁吉は性寡欲で、人との交わりを好まず、小さなあばら屋に起臥して、赤貧に甘んじ、別に工場らしいものもなく、特別な機械器具も無かった。また、誰か彫刻、器械類の製作を請う者がいても、気が向かねば容易に造らなかつた。性格伝説。

5-6 藩士の小川清太がある時、弁吉の工場を訪ねて見れば、その工場内がまことに貧弱なものであることに驚いた。その時弁吉は小川清太が腰につけていた革袋を是非欲しいときかないので、これを与え、いったい何に使うのかと聞くと、笹木を納めて携帯に便利だからという。すなわち弁吉は時機に触れ占筮を行っていたものである。卜占師伝説。

5-7 現大野町の喜楽彦三家はかつて江戸末期には金石愛后町にて料理屋を営んでいたが、弁吉は食えなくなるとその料理屋に現れ、食事をするかわりに何かを作ってそれを置いてい

った。現在喜楽家に伝わる弁吉の作品はその時のものである。また、弁吉は子供達によく竹トノボを作っては飛ばしてみせたとはいわれ、さらに料理屋の台所からは蜆貝の殻に酒粕を入れて持ち帰ったとも伝えられている。清貧生活伝説。

5-8 弁吉は熱心な稲荷信仰者であり、屋敷の一角に稲荷祠を建てて祀っていた。その大きさは幅約三尺五寸、高約三尺の勾欄と階段を付けた宮殿だったが、弁吉の死後屋敷が海砂に埋没したので今は何も無く、後に付近の人々はこの社祠を郷社日吉神社境内に移し、明治四十年に合祠した。そしてこの辺りを稲荷町と名付けて弁吉の足跡を遺している。稲荷信仰者伝説（ちなみに、稲荷町は弁吉が在住していた頃からの町名である）。

5-9 弁吉は銭屋五兵衛の造船を手伝ったのと同時に、朝鮮語が出来たので最初は通訳として長崎にて銭五に雇われたともいう。また銭五の恩義に感じ、銭五没落後も銭屋家に入り出して遺族を慰めていた。銭屋五兵衛関係伝説。

5-10 弁吉は日頃から、キン（金）という名の猿を愛育していたが、弁吉が死亡すると、その日から金は悲哀のあまり食を絶ち、間もなく死亡したという。動物愛護伝説。

5-11 その他、前述した主として永井柳太郎によって推察された弁吉がシーボルトの従僕として仕え、西洋科学を学んだ後、シーボルト事件の連座を恐れて、対馬・朝鮮に逃亡したという仮説も、現在地元では伝説化している。シーボルト関係伝説。

（6） 舎密術・窮理学に関する伝説

6-1 かつて、弁吉は加賀藩公の命により給仕人形を造った。その進退動作はまるで人間のように変わらなかった。ある日、この人形が茶託を捧げ、膝行して藩公の前に進み出てくるのを見ると、その容姿がとても器械には見えなかったので、藩公は大いに感心し、戯れに扇子でもってその頭を打った。すると人形はすばやく立ち上がり、大きな眼を開き、腰の刀に手をかけ、今にも抜きかからんとした。藩公は大いに驚き、即刻弁吉をよんで、その悪戯を戒めると、弁吉はこのようない興もあろうかと、予め考えて戯れに仕掛けを施しておいたと言いつて述べて陳謝したけれど、藩公の怒りはおさまらず二度と拝謁を許さなかった。絡繰人形製作伝説。

6-2 また、弁吉はピョンピョン飛び跳ねる器械仕掛けの蛙や水上を煙を吐きながら走る汽船の模型などもつくった。奇器製作師伝説。

6-3 かつて、ある人の求めに応じて大黒天の木像を彫ったが、気に入った物が出来ずたくさんの大黒天の木像が山積みとなった。やがて注文主が現れて督促すると、弁吉は一つの袋を指差して、気に入ったものは何も無いが、その中からどれでも自由に選んで持っていってくれ、ただ自分の彫った大黒天像は、どれも皆水上を渡り歩くようになっていると話した。注文主が、その言のとおり試みると、大黒天像は群れをなして水上を走ったという。彫刻と絡繰仕掛けとの融合伝説。

6-4 弁吉はある時、一羽の鶴の模型を造って、紐で鶴の両足を固く束ね、空中に放つと、鶴は翼をひろげて高く飛び、低く下り、少しも本物の鶴と変わらなかったの、見る者は驚嘆したという。舎密術伝説。

6-5 弁吉は世の中に写真術というものがあると聞き、数日間にわたり工夫研究するとみごとに写真を写してみせた。しかし、この術をもって村人を写さんとしたが、切支丹の妖法なりと言って、誰も写してもらおうとする者がいなかった。ところが、日頃から弁吉に算学を習っていた初代藤井伸三という弟子が、ひとりだけ進んで応じ写させた。それは文久年間のことで、伸三が15、6歳の時であり、その写真は硝子撮影にて、今日でも大野の藤井伸三家に保存されている。ちなみに初代藤井伸三が江戸へ出る際に、弁吉は福沢諭吉宛の紹介状を添えたといわれている。

また、弁吉の写真機の製作については、弁吉が長崎遊学時代か、紀伊国に遊んだ頃学んだと伝えられ、かつて弁吉の妻うたの30歳頃の写真が発見されたことがあったが（河波有道の記述による）、妻うたは文化十一年の生まれであるから、弁吉がこの写真術を実行したのは天保末年から弘化年間の頃となり、日本に初めて写真機が伝わった時期としても、最も初期の頃のものとなる。

文久年間の頃、河波有道（加賀藩の蘭法医師）というものが、他所から一枚の銀板写真を入手して、弁吉にこの写真術法がわかるかと質問したことがあった。弁吉は笑いながら2、3日後に自分の所へ来てくれと答えた。約束どおり訪ねると、彼は一枚の写真を示したので、河波有道は驚嘆したという。

ちなみに、現在弁吉が撮ったと伝えられる写真には、弁吉自身を撮影した写真（一説には嘉永二年、弁吉が49歳の頃）、または弁吉と銭屋五兵衛の長男の要蔵とが並んで写したと伝えられる写真焼付が現存している。以上は写真機発明伝説。

6-6 弁吉は越前の大野藩に招かれ、藩の銀山採掘に力をかけたという。鉦山師伝説。

6-7 弁吉はきわめて珍しいエレキテル（電気）を玩んだともいう。奇器製作師伝説。

6-8 弁吉が造った品物には、当初銭屋五兵衛の注文によるものが多く、船の航海に必要な遠眼鏡、羅針盤やランプ、銭五家の屋内のギヤマンの灯火具などであった。その他、発火具（ライター）や歩度計（万歩計）、時計などが知られている。奇器製作師伝説。

6-9 弁吉は航海術に長け、外国の事情に精通していた。かつて銭屋五兵衛と親交があって、銭五のさまざまな企画に参画し、その事業を助けた。航海術伝説。

6-10 文久三年に加賀藩士であった浅津涉（後に南郷茂光と改名）が、藩の軍艦発機丸を操縦し、横浜より能登七尾にあった軍艦所まで回航する途中、宮腰（現在の金石港）に寄港したところ、弁吉1人が軍艦内の観覧を許された。弁吉は艦内に入るとただちに機関についてさまざまな質問をしたけれど、浅津涉をはじめ誰ひとり弁吉の質問に答えられる者はいなかった

といわれ、彼の着眼の鋭さに敬服したという。機械知識の博学伝説。

6—11 弁吉は能登の七尾軍艦所の構内に蒸気機関車（陸蒸気）を走らせたという。

6—12 弁吉は地球儀を造り、旧来の天動説と地動説とを比較して、ある真宗の僧侶にこの理論を説明したという。西洋知識伝説。

6—13 弁吉は器械玩具類の他に火薬を製造し、拳銃をも造った。奇器製作師伝説。

6—14 金沢の刀鍛冶師の子に嘉右衛門という名の人物がいた。彼は弁吉の門人の中でも出色の弟子であったが、ある時弁吉が若狭の小浜藩公に招かれ、大砲を製造する際に嘉右衛門を同行したという。小浜藩公は弁吉を召し抱えようとしたが、先に加賀藩からの招聘を断ったほどであったから、小浜藩に仕える意思はなく、固く辞退した。その代わり、弁吉の子供でもよいからとの招聘に応じて、弁吉は同行した嘉右衛門に、弁吉の本姓である佐々木姓を名乗らせ、小浜藩に仕えることとなった。しかし、後に嘉右衛門は事に座して、自刃するはめになったという。砲術師伝説。

（7） 医術に関する伝説

7—1 A—5の類似話として、ある時小川清太が弁吉を訪ねると、その頃弁吉は既に年老いた老人だったが、頭は禿げていても体の骨格は逞しく立派な大男であった。小川清太が根付時計の修理を頼むと、弁吉は丁重に断った。その時、弁吉は小川が日陰時計を入れていた革製の巾着を見るや、しきりにそれを欲しいという。いったい何に使うのかと聞くと、弁吉は近頃外科を始めたが、その巾着の中に針や切れ物などが残らず入りそうなので、重宝なものだと言った。小川はすぐさまそれを弁吉に贈ったという。外科医師伝説。

7—2 弁吉は西洋医学に精通していたので、人の求めに応じては治療し、特に梅毒療法には優れた技術を持っていたと言われる。明治末期から昭和初期にかけて花柳病の病院として名高かった金石町の柴田病院の先代は、弁吉から梅毒医術（水銀療法）の秘法を学んだと伝えている。梅毒治療伝説。

7—3 ある時、大野村の浅黄屋喜右衛門（今井喜右衛門）が狐に憑かれて狂気したことがあった。弁吉は呪文を唱えて、これを祓い、喜右衛門の病気を治してしまった。その時たまたま京都の弁吉の友人が滞在していて、彼は戯れに次のような狂歌を詠んだ。

「浅黄さんつい紺さんが染めついて 弁がかかって紺は鳶色」

すると、弁吉は屋敷内に稲荷祠を建て、狐を祀ったが、喜右衛門はその奇瑞に感嘆して、石の鳥居と額とを寄進したという。精神病治療伝説。

（8） 彫刻師としての伝説

8—1 かつて、弁吉は能登の北前船風待ち港として知られた安部屋村の豪商小坂屋某の客室欄間に千疋の猿の彫刻を造るよう依頼され、自分が飼っていた猿の挙動を日夜観察してみごとにそれを完成させた。その作風は凜乎として生氣躍動の逸品であったという。この作品は今

は無く、一説にはある外国人に高い値段で買い取られたという。

また、別に小坂某は弁吉の対抗馬として、当時北国の名工として知られていた、越前三国の金生という者にも同じ猿の彫刻を頼み、やがて出来上がった2人の作品を比較すると、最初、小坂某は弁吉の作をいたく非難したが、いざ欄間に取りつけると、弁吉の作品は凜然として生氣を表したともいう。

8-2 弁吉が造った田炉裏の自在鍵の多くは、魚の鯉の口のなかには玉がくわえられており、それは彼の一刀彫りの技術によるものである。

8-3 弁吉が作ったという彫刻物には細かい細工の根付けが多く、その代表として蛤喜見城、女達磨が知られている。蛤喜見城は貝の蛤形の口の中に碁を指している2人の支那人が彫り込まれており、また女達磨は、漆を塗った麗しい表情の女性の形をした達磨の器の蓋を開けると、中には象牙で作った人形の骸骨が入っており、美しい女性でも死ねば皆醜い骸骨になる、といった弁吉特有の皮肉というか洒落っ気が表現されている。また、金沢市内には弁吉作と伝えられる獅子頭が数多くある。⁽¹⁶⁾

4. 弁吉の伝承的世界の分析

以上の伝説を注意深く読みとり、『一東視窮録』に記された項目とを照合していくと、これに合致するもの、しないものとの区別が考えられる。

まず、出自関係の伝説のなかで、弁吉がシーボルト事件の連座を恐れて対馬から朝鮮に渡ったという伝説について、『一東視窮録』には「竹紫紅画染付」の技法伝授として「朝鮮伝来 一東朝鮮=渡受来ル法」という記述のあるところから、シーボルト事件と関係しているかどうかは不明だが、朝鮮に行ったことは確かである。

また、銭五の船に乗って、朝鮮語の通訳として雇われたという通訳説についても、このような記述によりまったく否定はできないが、どの程度の朝鮮語を熟知していたのかは不明である。

また『一東視窮録』には総じて、中国との直接の関係を示した記述は少ないが、本草によるとみられる漢薬の製法が数多く記され、なかには「清朝程赤城伝」と題して「極上品之引茶 阿仙薬（インド・マレー半島原産のガンビールのこと）各三錢（匁）目 薄荷（ハッカ）甘草（カンゾウ）各一錢目」との記載があるところから、中国（清）の医術薬学の知識にも、弁吉はどこかで触れてきた形跡がある。

次に、弁吉が三味線一丁で加賀に来たこと、城下を虚無僧姿で彷徨し、尺八の名手であったことについては、『一東視窮録』には「三味線上引」と題して三味線糸の製法についての記述があるのみだが、これとは別に「竹田ぜんまい加ら久里 細工人大野弁吉門人中」と記された興行ちらしの刷物が、何枚か見つまっていることから、興行師としての弁吉像が浮かびあがり、

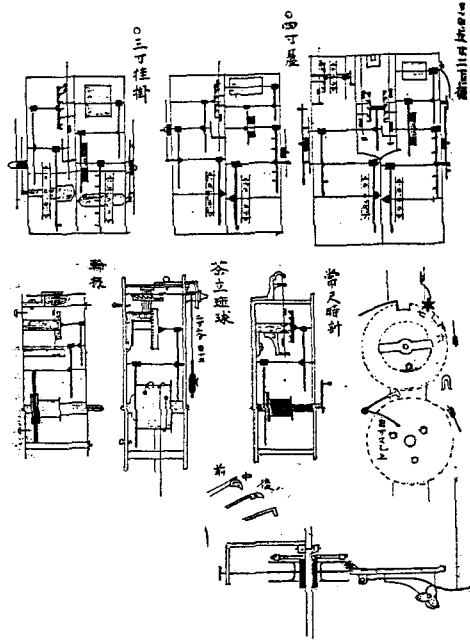


図10 時計絡繰の歯車構造を示した断面図

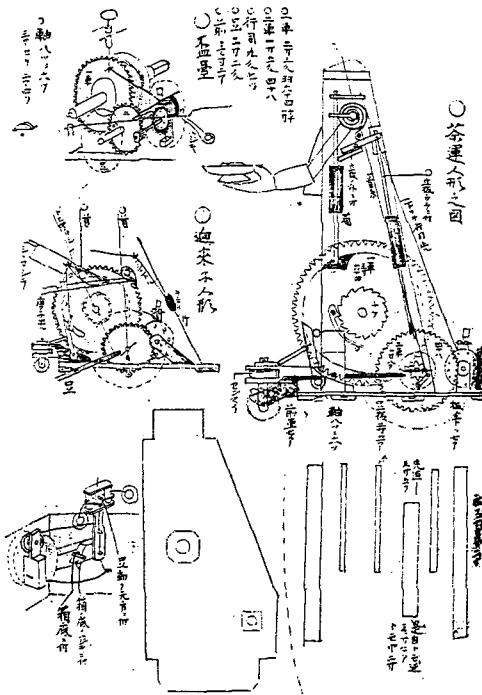


図11 茶運人形の絡繰図

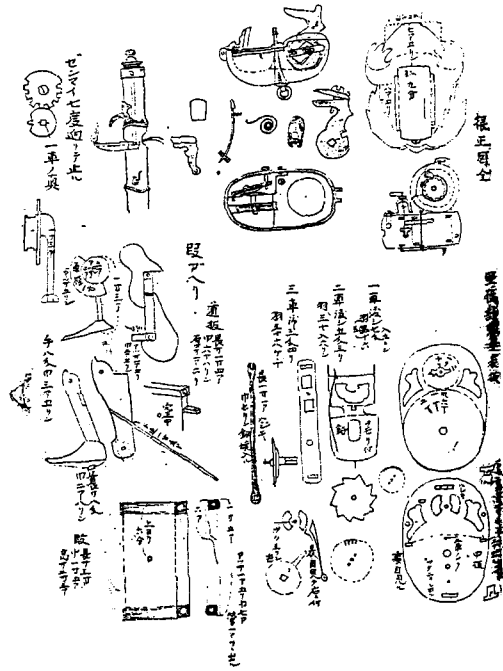


図12 根付娃の製作図

三味線・尺八の音楽に長けていたことは否定できない。⁽¹⁷⁾

革袋にちなむト占師伝説については、『一東視窮録』には何も根拠となる記述は無い。従って、これは弁吉がキリシタンバテレンの魔術を扱うというのと同じように、怪しげな人物像を示した、まったくの伝説化であろう。

弁吉が愛玩動物としてキンという名の猿を飼っていたのは事実のようだが、当時としては家庭で犬や猫を飼うのと異なり、猿を飼うというのは大名や上層階級の武家、豪商以外には異例のことと考えられ、ここでも弁吉特有の西洋風貴族的な趣味性を感じさせる。

舎密術・窮理学に関する伝説では、まず絡繰人形について、藩主の前で刀に手をかけた茶運び人形の話は、かなりオーバーであって、ここでは加賀藩や小浜藩からの招聘を断った、弁吉の幕藩体制に対する反骨精神と絡繰人形のエピソードが相俟って出来たものと考えられる。

前述した弁吉の写本という『奇器製作書』は、土佐藩出身の窮理学者である細川半蔵頼直が寛政八年(1796)江戸にて刊行した『機巧図彙』3巻の写であり、『一東視窮録』の茶運び人形製作図も、ほぼ同一のものと考えられる。ちなみに『機巧図彙』には項目として、掛時計・枕時計・尺時計・櫓時計・茶汲人形・五段返・連理返・龍門滝・鼓笛児童・揺盃・闘鶏・魚釣人形・品玉人形 以上13種が記されているが、『一東視窮録』の時計絡繰図も、ほぼこれに対応している。⁽¹⁸⁾

水上を走る大黒天像や飛び蛙、空を翔ぶ鶴などについては、『一東視窮録』に水素ガス製造の技術が示されていることから、弁吉にはそれほど難しい技術とは思われない。

この『一東視窮録』のなかでも、弁吉が唯一オリジナルな発明品として強調し、記述しているのは、「新作根付蛙」である。ここには「於和国初作之 大野鶴寿軒一東 裏板彫之 嘉永六年癸丑三月十五日出来」と記されているのが注目される。

ちなみに嘉永六年(1853)といえ、弁吉が満52歳の齢であり、この根付蛙の器械仕掛けについては、それほど画期的なものとは見えず、これが弁吉の生涯を通じた唯一の発明品だとすれば、弁吉の能力がさほど高度なものであったとは思われない。

さらに写真術について、これはこれまで弁吉の研究者が最も注目してきたものであり、『一東視窮録』には次のように記されている。(図13参照)

「イヨジューム鏡 ダキウル 以銀鏡(薄枚ニ作銅ニハル)イヨジューム之煙風(ヨジュームノケムリニ当ル)ニ能々当其俛早ク蓋ヲシテ写真鏡之箱之中ニ入日天ヨキヲウカガイ右之蓋ヲ横方ニ引取シハラクシテウツルヲウカガイ早ク蓋ヲ横方ヨリ如元ニサシ其俛箱之内ヨリ出シ扱火中ニ水銀ヲ入其烟ニ当右之蓋ヲ横方へ取り能々水銀烟氣ヲ当其俛外箱ニ入貯但シ平日モ亦蓋ヲメ貯事為良 水銀箱ノ内ニ鉄血ヲ入其中ニ入焼酒火付具アタタメニテ水銀ノシヨウ気当ル イヨジュームハ箱ノ内ニ置上ニ銀 ヲウツムケニ置気ヲスワスナリ二度保尤夜クウキ和ヨシ」

また、これと関係して、弁吉の弟子の1人であった朝倉長右エ門が嘉永二年（1849）に記述した『大野一東之伝法諸々免許』と題された文書の中には「写真仕方」という記述がある。ここでは、「酒ノさうちろヲ五六へんとりかやして後、干砂を焼是ニ而右さうちろとりかやし、らんびきニ而とる事。板硝子ニても塗付干付是ニ写す也。前鏡より後鏡写、是ニ而右硝子あてそのまゝ舂うつすなり」とある。（金沢市 朝倉昭文氏蔵）

前者の『一東視窮録』の記載は、いわゆるフランスのダゲールが1837年（天保八年）に完成し、ダゲレオタイプと呼ばれた銀板写真法の技術を示したものであるが、後者は稚拙ながらも、その後発明されたいわゆる湿板写真法を示した記述であることに注意される。

目下、筆者と共に大野弁吉研究を推進して

いる石川県立歴史博物館学芸員の本康宏史氏の考証によれば、従来わが国に写真術が渡来したのは、一般に長崎の上野俊之丞が、蘭船より輸入したダゲレオタイプ写真機を薩摩藩主の島津斉興に献じ、撮影した天保十二年（1841）とされていたが、この説はその後の研究で否定され、「現段階では天保十四年（1843）に渡来したものの一度持ち帰られ、嘉永元年（1848）に再渡来」「嘉永二年（1849）の島津斉興書状に、銀板写真についての具体的な記述がある」（国史大辞典）と流動化していること。弁吉の写真が重要な点は、ダゲレオタイプでない湿板写真法であり、日本における現存最古の湿板写真は安政五年（1858）とする写真史の記述を修正しなければならないこと。なおかつ、世界の湿板写真の発明は英国のアーチャーによる発表とされ、それは1851年（嘉永四年）のことであり、弁吉の写真術はそれより早いことになる旨指摘して⁽¹⁹⁾いる。

ちなみに、わが国における写真術の書物が刊行されたのは、慶応三年（1867）に江戸で尾張名古屋出身の蘭学者であった柳川春三が、1864年にフランス人のダグロンが書いた著書を翻訳した『写真鏡図説』と名付けられたものであった。

この訳書を後に解説した山田秋衛氏によれば、『明治事物起源』には「嘉永の頃、水戸烈公、写真術の書物を長崎に得て、柳川春三に托して、これを翻訳せしめた」とあり、『風俗史料』の「写真昔話」には「烈公の臣菊地忠が、命により長崎に赴き、和蘭本の写真術初歩というを

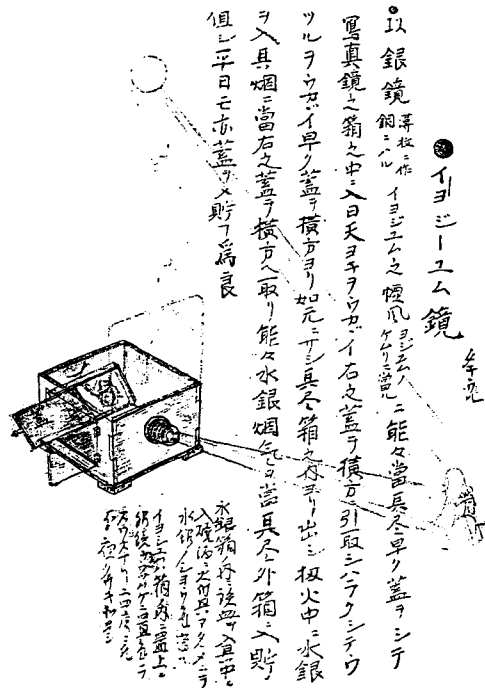


図13 「イヨジューム鏡」と記された銀板写真法の仕法を示した解説と図

得て研究したが、蘭語未熟のため、柳川春三に就て習得しながら研究した」との意を記しており、春三の長崎遊学は確実らしく、尾佐竹猛氏の説では、その時期は安政二、三年頃かという。いずれにしろ、この『写真鏡図説』には湿板写真法も示されているが、弁吉よりはずっと後年のことである。⁽²⁰⁾

弁吉が銭五の船の航海に必要な遠眼鏡や磁石、羅針盤を製作したことについては、『一東視窮録』の記述より事実であると考えられる。

しかし現在、朝倉家に残る真鍮製の測量器具は、長い間、弁吉作と伝えられてきたが、最近筆者が実際に調査してみると大小2点あるうち、大には「嘉永五年 加州高畠村 朝倉長右エ門所持 金沢津田直次郎永寿作之」と記され、また小には「加州 米林八十八」とそれぞれ真鍮盤の裏側に彫られていた。

さらに、大野町にある弁吉作と伝えられる遠眼鏡にも「文政甲申七年五月」と記され、この時期は弁吉がまだ加賀に来る以前のこととなり、このように今日弁吉作と伝えられている奇物の全てが合致しているとは限らない。

なお、加賀藩の軍艦において弁吉が機関に熟知していたという伝説についても、『一東視窮録』には船舶機関に関する記述が一切見当たらず、いささか伝説の域をでない話ではある。そ

して、大砲の製作など幕末の兵器産業に関する技術についても、確かに『一東視窮録』には記述があるものの、小浜藩や加賀藩など当時の幕藩体制のなかで、弁吉のような民間人が介入する余地があったとは考えにくいことであろう。

また、弁吉の航海術伝承は、銭五の密貿易と微妙にからまっていると思われ、それを立証する史料が全くないため、実態を探ることは困難である。

しかしながら、銭五が本格的に海運業に乗り出したのは天保元年(1830)であり、十一月には大坂で宝銭丸を新造し、以後一説には100余艘に上る船舶を新造または購入したと伝えられている。従って、ここで興味深いのは前述の立川昭二氏も指摘しているように、

弁吉が加賀を訪れた時期が、この銭五の宝銭丸新造とまったく同時期であることの偶然性

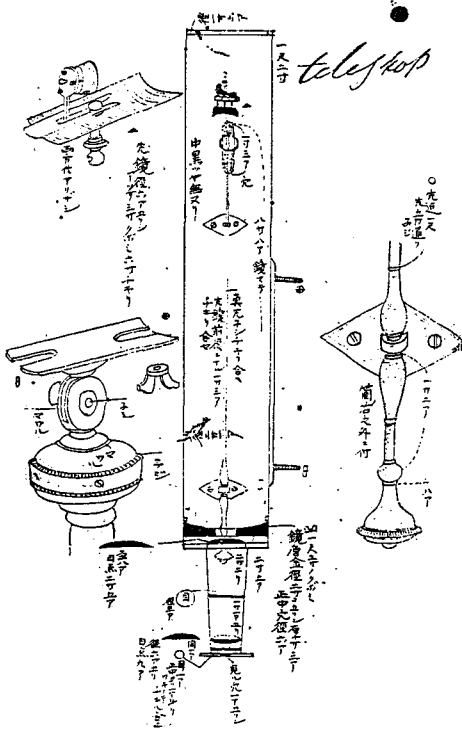


図14 Teleskop とオランダ語で書かれた望遠鏡の製作図

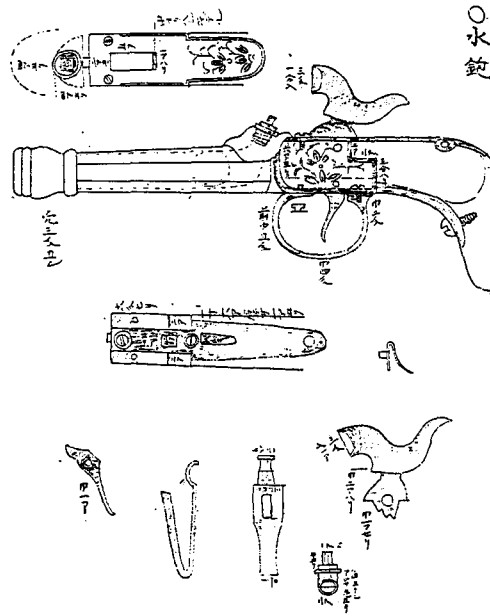


図15 「水鉈」と記された拳銃図

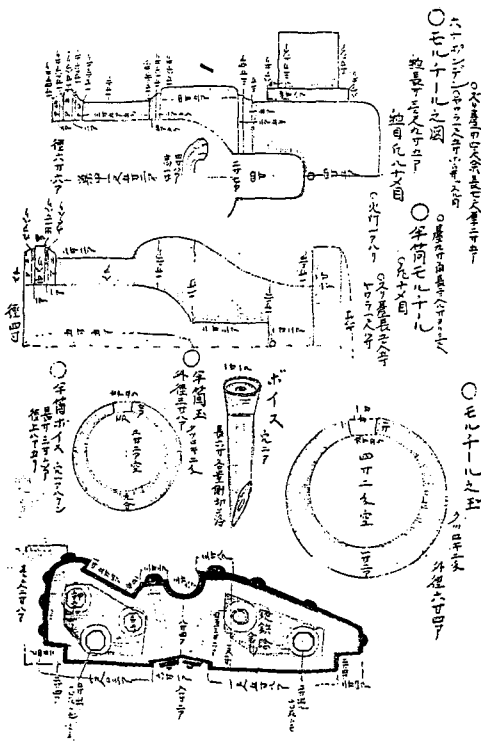


図16 モスチール大砲の製作図

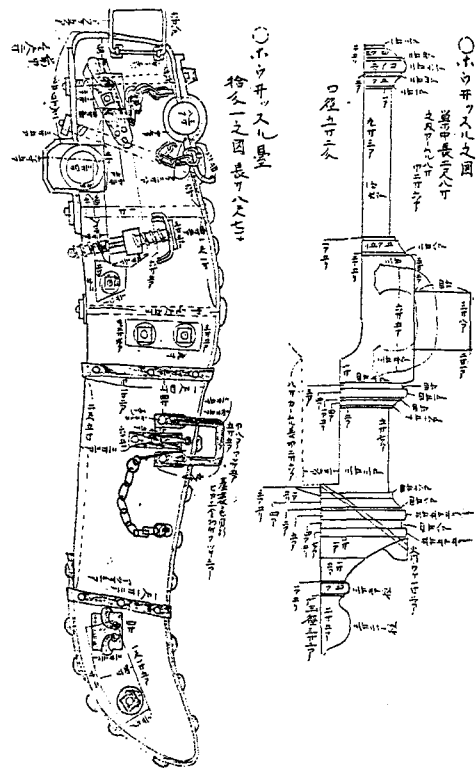


図17 ホイッスル大砲の製作図

⁽²¹⁾
についてである。

ちなみに、銭屋五兵衛の海外貿易については、以前から朝鮮をはじめ中国・ルソンあるいはタスマニアまで進出したという伝説がある。これらの航海の事実についても明瞭ではないが、かつて郷土史家の和田文次郎や東本願寺の宗務総長をつとめた石川舜台などを中心に、金沢の政治家や経済人、宗教家などの文化人が刊行した明治二十四年(1891)の『共潤会雑誌』に掲載された記録によると、明治十八年(1885)頃にオーストラリアのタスマニア島を訪れた日本の軽業師興行の一座が島を見聞したおり、島内にはここが銭屋五兵衛の土地であることを示した、石碑が建てられていたことが記載されている。⁽²²⁾

これについてはいつ、誰が、どこでどのように土地購入手続きをしたのかなど不明な点が多いが、かつてタスマニア島はオランダ東インド会社の領有地であったことから、弁吉がかねてより接していたオランダ人を通じて、このオランダ東インド会社と銭屋五兵衛との間で折衝がもたれ、両者の関係がまったく無かったとは言えないであろう。⁽²³⁾

次に、医術や薬学に関する伝説については、外科医術および梅毒治療の記載が無いことから、これらの事実は否定できるが、憑物病の治療薬に関して弁吉は「巴雄黄姜湯 狂気狐狸付ヲ下ス 巴豆 大黃 乾姜 雄黄 各等分飯丸目形杵用冷物禁」と記していることから、このような薬物調合に効能があるかどうかは不明ながらも、憑物病の何らかの処置を行っていたことは確かである。

弁吉の弟子である朝倉長右エ門の孫にあたる朝倉ふみさんの伝承では、弁吉の薬調合法を習った長右エ門は、さまざまな薬を作っては村人に飲ませ、病気を治しては感謝されていたと伝えていることから、まったく出鱈目な薬処方ではなかったと考えられる。

ちなみに、『一東視窮録』に記載する薬物は、基本的には江戸後期に既に知られていた薬用植物が使われており、なかでも西洋原産のウイキョウ、アフリカ原産のアラビアゴム、小アジア原産のアヘン、中国北部・シベリア原産のカンゾウ、中国原産のボウフウ・サンシュ・ケイガイなど、諸外国産の植物が数多く使われている点が注目される。⁽²⁴⁾

特に「ローザワートル」と題した野イバラの露という眼病の薬や「ケレスベル」という大便を出す浣腸薬については、オランダ語で説明していることから、蘭法医学による知識と考えられるが、このような蘭法医術の記載は全体としては数少ないものである。

同じく、西洋知識に関する記述は、伝統技術の項目のなかにもいくつか見られ、宝石のカットの手法、色ガラス製作、イギリス陶磁器、オランダ品の蕪木煎法などがある。

5. 弁吉伝承の背景とその構造

以上、筆者の拙い科学知識とわずかな参考資料による弁吉の伝説と『一東視窮録』との照合作業および、伝説の真偽等を分析し検証してみたが、ここで総じて言えることは『一東視窮録』の記載はあまりにもメモランダムであり、かなりの数の項目内容にもかかわらず、いずれも完結した整合性のある記述でないことが気になるのである。

これは弁吉の断片的な知識の結果なのか、あくまで奇物製作師として物を作ることが本業であることから、製作上必要な知識の一部を書き留めたものなのかは判然としない。

しかし、いずれにしろ弁吉の伝説にもみられるように、その実態が茫洋としたものであること自体が、本格的な西洋窮理学の本道に行くものではなかったのであろう。

弁吉が生きた当時「加賀は天下の書府」と呼ばれるほどに学問が盛んであり、当時の加賀藩の洋学事情をみると、弁吉に蘭学の知識を与えたり、或いは開国論等の思想的な影響を与えた可能性があると思われる人物が数多く浮かび上がってくる。

ちなみに、弁吉に近い系譜の人物としてあげられるのは次の人々である。

まず、文化六年（1809）に江戸の数学者であり、独特の開国論を唱えた本多利明が加賀藩12代藩主の前田斉広に招かれ、二十人扶持で召し抱えられ、藩の明倫堂にて藩士を教育した。利明は関流の算学を今井兼延に、天文学、暦学を千葉歳胤に学んだ後、航海術を得て自ら造船し、幕府の命をうけて蝦夷地を探索した人として知られていた。しかし、この利明は藩内の嫉妬や藩士が未熟なるが故に失望し、わずか半年の後には江戸に帰ってしまったとされている。⁽²⁵⁾

この本多利明の弟子には、後に藩制改革のみ旗を掲げて失敗した黒羽織巻を指揮した上田耕（作之丞）をはじめ、宇野保定、萩原秀庸、近藤幸克、中西惣兵衛などがいるが、そのなかでも注目されるのは三角風蔵、長谷川猷、大橋作之進、河野通義などの蘭学を学んだ藩士たちであった。⁽²⁶⁾

三角風蔵は天明四年（1784）に加賀国河北郡二日市村の百姓の次男として生まれ、成人してから後、金沢に出て足軽となり、さらに江戸に出て早くから本多利明に弟子入りし、測量術を学んだ後は、藩命によって能登の海岸測量や実測にもとづいて作成された金沢分間絵図の仕事に携わったという。

また、江戸の砲術師範について風砲術を学び、今日でいう空気銃を金沢城内二の丸銃砲所で製造させ、自らその棟取となって陣頭指揮をとった。

この風蔵の逸話のなかには、江戸の本多利明の庭で、水素ガスを詰めた風船（気球）を飛ばせた際、風蔵がこれに乗り込み隣家の庭に落ちたという話が伝わっている。ここでは風蔵の字名が風砲術を扱う人あるいは風船乗りの人という名前の由来譚と関係していることが面白い、

また弁吉が鶴の模型を飛ばした伝説にも類似している点に注意される。

大橋作之進は本多利明より航海術、和蘭語を学び、後に砲術を得て、安政元年(1854)に藩の西洋火術方役所の棟取となり、さらに藩が初めてつくった洋式学校である壯猶館の設計に携わった人として知られていた。

河野通義(久太郎)は算学を石黒信由に、利明には測量術を学び、三角風蔵と同じく金沢分間絵図の仕事に携わっている。そして後には蘭学者の黒川良安にもついで天文・暦学を修め、『製八線対数表法』などの西洋数学の本を著している。

利明の弟子のなかでも、とりわけ出色なのは長谷川猷(源右衛門)であるが、猷は藩士の長谷川順左衛門の息子で、家禄百石の城内における書物奉行の家柄にあった。利明からは特に航海術と開国論を学び、大地球儀を自作して自分の部屋の天井から吊るしながら、日夜世界を眺め思考を巡らしていたといわれ、後に『救荒新策』と題する経済著書を出している。

また、長谷川猷は越中出身の蘭学者黒川良安を、当時藩の老臣であった青山将監知次に蘭法医として推挙していることから、蘭学への関心を逸早くもっていたとみられる。

さらに、この長谷川猷家には銭屋五兵衛が親しく出入りしていたと伝えられ、猷が説いた世界貿易経済論は銭五の海運業や貿易商法に多大な影響を与えていたと考えられる。

従って、天保年間以降に銭五の影の人として行動をともしていた弁吉も、この長谷川家に出入りし、本多利明の弟子たちや蘭学者の黒川良安などの接触を通じて、さまざまな洋学の知識、理化学の技術を見聞きした可能性は大きいといえよう。

そして、この長谷川猷を含めた利明の弟子たちは、いずれも藩では下級の武士たちであり、彼らは時代の先端をゆく科学技術や新しい西洋の思想を懸命に吸収し、その学問を具現化することによって本多利明の説く、新しい海外貿易論の思想に近づこうとしたのであろう。

そのためには経済的パトロンでもあった海商人の銭屋五兵衛と結び、また銭五とともにあった奇物製作師としての弁吉の存在は、彼らの得た洋学の知識による種々の器械や道具を実現することの出来る細工人として必要であり、かつまた重宝な人物であった可能性も考えられる。

すなわち、幕末期の金沢には長谷川猷を中心とした蘭学や舎密学・窮理学あるいは開国論を議論しあう科学者サロンといったものがあり、弁吉もその中の一員として存在し、それは当時、小江戸と称されていた城下町金沢のまったく江戸のミニチュア化の現象であったと想定される。⁽²⁷⁾

しかし、この科学者サロンが求めていた目論見はすぐに挫折したとみられ、それは次のような銭五の事件と呼応していた。

すなわち、まず嘉永二年(1849)に銭屋五兵衛は蓮湖(河北潟)の埋め立て事業を藩に出願したが、同じ頃に長連弘・上田耕らが藩制改革を求める黒羽織党を結成している。

そして、同五年には干拓にともなう石灰による鉍毒事件が発生し、銭五一門は捕らえられ、同年の十一月二十一日に、五兵衛は牢死する。

この銭屋五兵衛の獄死とお家断絶、家財没収の悲劇の背後には、一説によると加賀藩は銭五を使って早くから西洋など諸外国との密貿易を行っていたが、幕府の天保の改革などの締めつけにより、その事実の発覚を恐れた藩が、銭五にすべての容疑をなすりつけ、詰め腹を切らせたという説が古くから言われている。⁽²⁸⁾

さらに、藩制改革を求める黒羽織党の動きとも呼応していることから、その背景に銭屋五兵衛が絡んでいたというのも、嘉永六年（1853）に五兵衛の息子の要蔵が磔刑に処せられたのと同じ年に、黒羽織党が失脚したのであって、これらの状況はまったく無関係とはいえないであろう。

このような政治状況を考慮にいとると、これまで述べてきたような弁吉の伝説には、これら進歩的な藩士たちの、さまざまな技能を収斂させた象徴的な人物像としてとらえられ、それは当時の藩体制が新しい思想や学問を疎外した結果とも受け取られる。

そしてそのような負の方向に走る藩の政治情勢が、しだいに民間に流布してゆくにしたがって、進歩的な藩士たちの新しい思想や学問を、ひとりの怪しげな絡繰師の伝承的世界に封じ込めることによって、時世を理解してゆこうとする民衆の知恵が働いたようにも考えられる。

銭五の死後における弁吉の晩年の諸業については、ほとんど何も語られてはいないが、こうして伝説などを照合してゆくと、『一東視窮録』の成立年代が嘉永六年（1853）以降であるところから、そこには以前からの銭五を通じた藩士たちとの交流の機会を失って、まったく孤高の人となった弁吉にとって、それまでに自分が得た知識の数々を、1冊の著書に記録しまとめることのみが、弁吉の最後の生き甲斐となった感がある。

さらに、このような弁吉と本多利明の弟子を代表とする長谷川猷との繋がり構造は、そこで歴史的には一度断絶し、つぎにその構造を継承したのは、廃藩置県後の明治初年に加賀における新たな殖産事業を次々と実現していった、長谷川猷の孫にあたる旧藩士の長谷川準也と細工人津田吉之助のコンビであった。

藩体制が消失し、5万人を有した諸士とその家族の生活を救うために興した長谷川準也が計画した殖産事業は、時代の先端をゆくものであり、それは金沢小柳村の製薬所（火薬工場）をはじめとして、水車の動力を駆使して自動的に海水を汲み上げるシステムを取り入れた能登島の製塩工場、明治七年に群馬県富岡の製糸工場をそっくり真似てつくった、同じく水車動力による金沢製糸場と燃糸工場、さらに輸出向けの加賀象眼による花瓶をつくった金沢銅器会社などであった。

また、この2人は明治八年（1875）には、加賀藩初代の藩主前田利家を祀る尾山神社を創建し、その新しいシンボル建築を意図した和漢洋折衷のエキゾチックな三層の楼閣構造を持つ奇妙な神門を建てている。ちなみに、この建築物には西洋風のアーチ形の石組や色ガラスのステインドグラス、避雷針が取り付けられている。

そして、これらの工場を設計し、生産器械をつくったのは加賀藩の工匠棟梁であった津田幸七の息子の吉之助であったが、彼の洋学知識やその技術の背後には弁吉ならびに米林八十八(一光)との何らかの関係を示すほどに、きわめて絡繰技術を応用したものであった。⁽²⁹⁾

こうして、明治三年(1870)五月十九日に没した大野弁吉の所業は、いつの間にか、幕末期に小江戸と称された城下町金沢の近世都市から機械産業を基軸とした近代都市へと、その都市的性格を変貌するなかで、まったく都市伝説と化していったのである。

それは柳田國男がいみじくも表現したように「都市は輸入文化の窓口である」といった都市民俗の主要なテーマに沿ったものとして理解されるであろう。⁽³⁰⁾

(1991・6・30記)

註

- (1) この記事は、立川昭二『からくり』(ものと人間の文化史 3)法政大学出版局刊 1969年、より引用した。
- (2) 弁吉の概略は鑄木勢岐(金沢市金石町の住吉神社宮司で加越能史談会の会員であった郷土史家)の長年にわたる錢屋五兵衛研究によるところが大きい。ちなみに、大正8年に刊行の『三州史料』第10冊には、鑄木勢岐「錢屋系譜」が掲載されている。弁吉の足跡に関する古い記録としては、他に、明治24年頃に発刊された『共潤会雑誌』に、杉本夢香なる人物によって、次のような弁吉紹介が記されている。「弁吉は京都の人、寛政十年、珠数屋町六条上ルに生る。父を六三郎といい、弁吉はその次男なり。世々羽根を商う故に羽根屋と称す。十四の歳に同地の細工師林某の弟子となる。歳二十余の頃に、諸国の神社仏閣を廻覧し、文政十二年、歳三十一才のとき、加賀に來たりて、前田土佐守に抱えられ、十人扶持を食み、河北郡大野邑に住む。時に水野出羽守の家臣に、砲術をもって聞こえたる松下健作というものあり。故あって流浪の身となり、加賀に來たおり弁吉と会い、互いにその芸術を交換し、弁吉は砲術を学ぶ。天保六、七年の頃、弁吉は若狭の酒井若狭守の招きに応じ、祿二百石を食む。仕えること三年、若狭では鑄金をもって大砲をつくり、好結果を得たり。弁吉また電気の術に明かなり、その力をかりて人目を驚かせり、又かつて数里時計(歩度計)、マッチ、写真、ミシン等未だ伝来せざる前にこれを發明し、国主に捧ぐ。惜しいかな当時、敢えてその法を習わんと欲するものなく、奇功空しく後に伝わざるを、慶応三年五月十三日死去す時に七十、同邑傳泉寺に葬る。」この記述は明治中期に記されたものの、問題が多いので、今後さらに検討を要する資料であると考えられる。
- (3) 1978年に実施した石川県立郷土資料館主催の特別展示『錢屋五兵衛』では、金沢市高島町の朝倉昭文家に遺された弁吉関係の遺品や書物の調査を初めて行った。
また、同館では1974年にも『藩政期の科学』と題した特別展も実施しており、その折に弁吉の器物を中心に発掘している。これらは、ともに図録が刊行されている。
- (4) 当初出た日置謙著『加能郷土辞彙』金沢文化協会刊 昭和17年、にはこの項目は掲載されなかったが、昭和31年の改訂版には追加されている。
- (5) 山森青硯『金沢で一番古い写真』自家版 青硯文庫双書1 昭和46年。
- (6) 貝塚茂樹他編『角川漢和中辞典』を参考とする。
- (7) 前掲書、立川昭二『からくり』による。
- (8) 京都国立博物館・東京国立博物館編『シーボルトと日本』朝日新聞社発行、1988年に掲載されたライデン国立民族学博物館所蔵の『螺鈿合子』写真による。
- (9) 吉田昭治『連座—シーボルト事件と馬場為八郎』無明舎出版刊、1984年による。
- (10) 前掲書、吉田昭治『連座—シーボルト事件と馬場為八郎』による。
- (11) 小倉謙監修『増補植物の事典』東京堂出版刊、昭和62年による。
- (12) 南親会編『蘭和大辞典』第一書房刊、昭和61年による。

- (13) 木村亨「秘密陰謀団にされたフリーメイソン」(『伝統と現代』71—9特集秘密結社) 伝統と現代社刊, 昭和46年より引用。
- (14) 吉村正和『フリーメイソン—西欧神秘主義の変容』(講談社現代新書) 講談社刊, 1989年による。
- (15) 前掲書, 吉村正和『フリーメイソン』による。
- (16) 以上の伝説内容については、主として前掲の籙木勢岐『錢屋五兵衛の研究』および田中鉄吉『郷土数学』を中心に、筆者が昭和50年頃に独自に収集したものである。主たる伝承者は金沢市大野町の故宮崎友吉, 故藤井伸三, 故粟森博吉, 喜楽彦三, 金沢市高島町の故朝倉ふみの各氏である。慎んで謝意を表したい。
- (17) 『竹田ぜんまい加ら久里』の興行ちらしは現在, 石川県立歴史博物館大鋸文庫の所蔵及び金沢市長土堀町の大友佐八郎家所蔵のものがある。
- (18) 寺石正路『土佐民間科学者傳』高知市民図書館刊, 昭和53年による。
- (19) これについては小林忠雄・本康宏史「加賀のからくり師大野弁吉」(『からくり人形展』図録所収) 朝日新聞社刊, 1987年の中で本康氏が指摘している。また, ダゲレオタイプの銀板写真法およびアーチャーの湿板写真法などの写真史については, 田中雅夫『写真130年史』ダヴィッド社刊, 1970年が詳しいので参照されたい。
- (20) 山田秋衛「写真鏡図説」解説, (名古屋叢書, 第13巻, 科学編所収) 名古屋市教育委員会刊, 昭和38年による。
- (21) 石川県立郷土資料館編, 展示図録『錢屋五兵衛』所収の「錢屋五兵衛略年表」1978年刊および前掲書, 立川昭二『からくり』による。
- (22) 前掲の明治24年頃発刊の『共潤会雑誌』には, また別に「錢屋五兵衛豪州を領す」という表題で, 次のような記事を掲載している。(一部省略する)
- 「百年前, 豪商錢屋五兵衛氏は, 日本近海にて貿易せしものと思ひしが, 何おや図らん遠く豪州に領地を有せしとは, 豪州の南部タスマニヤに碑石あり。蒼苔深く鎮して文字さへ読み難かりしが, 今を隔てること五, 六年前(明治18年頃か)我が輕業師彼が地に至りフト此の碑石を認め, 手もて其苔を剥き去れば, 下より「かしうぜにやごへいりようち」の十三字露れたり, さては加州錢屋の領地にてありしやと。然るに此事英人の耳に入りしに, 英人は直ちに悉く其碑石を撤去せしめたりといふ。今其碑石を以て境界となす時は其領地殆どタスマニヤ三分の一に互れりと。想ふに香港等にありし五兵衛氏の一族が五兵衛氏の刑せられたるを聞き本国に帰らずして直ちに此地に赴きしならんは, 何に致せ其碑石の今日に迄存せざるは最も惜むべきことにあらずや」と。
- これについて, 前述のウォーレン・リード氏もタスマニア島の玄関口である港ホバートに現在残る港湾記録中に1882年(明治15年)頃, 日本の輕業師一行の来たことが記されていたと証言している。
- (23) ちなみに『平凡社大百科辞典』によれば, タスマニア島は1642年にオランダ人タスマンが来航し, 1803年にイギリスの流刑地として入植が開始され, 1853年には流刑植民地の歴史を終えているとされている。
- ウォーレン・リード氏の言によれば, 1840年前後にはタスマニアの領地をめぐるイギリス総督とオランダ東インド会社との争いがあり, これにオランダが嫌気をさしたのと同時にオランダ東インド会社が当時斜陽化した時期とが重なったため, オランダがタスマニア領地を他に手放すことは充分にあり得ることだと述べている。
- いずれにしろ, きわめて興味深い記事ではある。
- (24) 前掲書, 小倉謙監修『増補植物の事典』による。
- (25) 前掲書, 田中鉄吉『郷土数学』および塚谷見弘「本多利明」(日本思想大系44『本多利明・海保青陵』解説) 岩波書店刊 1980年による。
- (26) 以下は主として前掲書, 田中鉄吉『郷土数学』および前掲書, 日置謙『加能郷土辞彙』による。
- (27) 田中喜男『金沢町人の世界』国書刊行会刊, 昭和63年によれば, 『加賀藩の著名な兵学者有沢武貞は「越登賀三州の武士, 大中小身, 皆一府に集まって広大をなすこと江戸の風」と述べ, 金沢を小江戸と見た。』と記しているが, 筆者は特に江戸末期の当時の風潮として, 何でも江戸風を真似ることの背景には先進文化の中心である江戸への憧れがあり, そのような風潮の強い地方都市が小江戸と称されたのではないかと考えている。詳しくは拙書『都市民俗学—都市のフォークソサエティー』国書

刊行会刊, 1990年を参照されたい。

- (28) 詳しくは若林喜三郎『錢屋五兵衛』(創元歴史選書)創元社刊, 昭和32年を参照されたい。
- (29) 長谷川準也・津田吉之助については, 主として北村魚泡洞『尾山神社誌』尾山神社社務所発行, 昭和48年および塚田凡堂『津田式織機発明者 津田米次郎』金沢鉄交会発行, 昭和12年によったが, 明治初年の文明開化および技術開発などには, 様々な都市民俗学的な諸問題があると考えられる。ここでは紙数の関係から触れないが, 別の機会に論述してみたい。
- (30) この問題の立て方についても, 詳しくは拙書『都市民俗学—都市のフォークソサエティ—』名著出版刊, 1990年を参照されたい。

ちなみに, 本稿は前述した小林忠雄・本康宏史「加賀のからくり師大野弁吉」(『からくり人形展』図録所収)朝日新聞社刊, 1987年をベースに新たに書き改めたものである。本康氏には文献などの提供をお願いしたことを付記し, 謝意を表す。また『一東視窮録』の原所蔵者である大友佐八郎氏には, 資料の公開に関してご快諾されたことも併せて付記し, 謝意を表したい。

(国立歴史民俗博物館 民俗研究部)

The Legendary World of a Mechanic, OONO Benkichi
and its Structure
—Urban Legend in the Last Days of the Tokugawa Regime—

KOBAYASHI Tadao

In recent years, the connection of Western technologies and rational thought with the starting point of modern Japanese science centered in Edo has been discussed in various forms, in a pre-modern-age argument. We do not have a true image of the mechanic, OONO Benkichi in Kaga, apart from the knowledge that he made the most of Western science to surprise his contemporaries. This paper aims to investigate the whole world of legend concerning this Benkichi and its structure, through his book "Ittoshikyuroku", and to clarify an urban legend of the last days of the Tokugawa regime.

It is said that Benkichi was born in Kyoto in the later Edo period, and went to Nagasaki as a young man to study western medicine and physical chemistry from a Dutchman. Then, he moved to the fief of Kaga, and there enjoyed a close friendship with a rich merchant, ZENIYA Gohei. Of Benkichi's works, a teaserving marionette, revolver, lighter, telescope, pocket magnet, measuring apparatus, pacemeter, and so on, have been handed down, and he is said to have used electricity.

A portrait of a Westerner, who looks like Ph. F. von Siebold, and a strange symbol resembling the English letter "A" are drawn on the cover of "Ittoshikyuroku". However, this Westerner has not yet been identified, as Benkichi's remedies for eye disease did not include a pupil-opening medicine, which was reportedly introduced by Siebold. The "A"-shaped mark resembles the symbolic sign of Freemasonry, which was established in England in the 18th century. This book includes records on chemistry, scientific apparatus, medical art, pharmacology, traditional technologies, and so on. When these were checked and analyzed together with his legend which involves the manufacture of strange apparatus such as marionette or camera, and remedies for mental diseases, it was found that they were copied from the "Karakuri-zui" (collection of mechanical drawings) by HOSOKAWA Hanzo, and his photography was silver-plate photography, or Daguerreotype.

As seen above, the description in the "Ittoshikyuroku" were only memorandam, rather than a consistent statement. In any case, the fact that the real image of the legendary Benkichi remains elusive shows that his technologies did not join the main flow of full-scale Western pyhsical studies. In Kanazawa, in the final days of the Tokugawa regime, there was a scientific salon of Samurai belonging to the Kaganhan(fief), who discussed Dutch studies, chemistry, physics, and argued about opening the country to foreign intercourse. Benkichi seems to have been a member. His activities became a complete urban legend through the transition of the character of the city of Kanazawa from an early modern castle town called "Small Edo" in the final days of the Edo period, to a modern city based on machine industry. This was because his activities were in line with the main theme of city folklore as propounded by YANAGITA Kunio that "a city is a window for imported culture".